

『高校生のための巡回公演』

令和6年度

統括団体による高校・過疎地域等学校派遣モデル事業

調査研究報告書

主催：独立行政法人日本芸術文化振興会



公益社団法人
Association of
JAPANESE THEATRE COMPANIES
日本劇団協議会

令和 6 年度

統括団体による高校・過疎地域等学校派遣モデル事業

『高校生のための巡回公演』

調査研究報告書

< 目 次 >

はじめに	4
「高校生世代の芸術文化環境の格差解消に向けて」 福島明夫（（公社）日本劇団協議会専務理事／青年劇場）	
第1章 報告書の概要	5
1. 調査全体の概要	
(1) 調査研究の趣旨・目的	
(2) 質問紙調査の実施方法	
(3) 調査研究の実施体制	
2. 調査結果の要約	
(1) 鑑賞者（生徒）アンケートの全体集計結果	
(2) 実施校アンケートの全体集計結果	
(3) 小規模校をめぐる状況	
第2章 「高校生のための巡回公演」鑑賞者（生徒）アンケート 集計・分析結果	11
1. 全体集計	
(1) 今回の鑑賞会以前における演劇鑑賞経験の有無	
(2) 鑑賞作品への満足度	
(3) 鑑賞作品の家族・友人への推奨度	
(4) 鑑賞後に感じたこと	
2. 小規模校の傾向分析	
(1) 今回の鑑賞会以前における演劇鑑賞経験の有無	
(2) 鑑賞作品への満足度	
(3) 鑑賞作品の家族・友人への推奨度	
(4) 鑑賞後に感じたこと	
第3章 「高校生のための巡回公演」実施校アンケート 集計・分析結果	17
1. 全体集計	
(1) 芸術鑑賞会において重視していること	
(2) 芸術鑑賞会実施にあたっての困りごと	
2. 小規模校の傾向分析	
(1) 芸術鑑賞会において重視していること	
(2) 芸術鑑賞会実施に当たっての困りごと	

補足資料 1 令和 5 年度調査との比較	20
1. 鑑賞者（生徒）アンケートの比較	
2. 実施校アンケートの比較	
補足資料 2 地域別比較	24
1. 鑑賞者（生徒）アンケートの比較	
2. 実施校アンケートの比較	
補足資料 3 公立・私立による比較	28
1. 鑑賞者（生徒）アンケートの比較	
2. 実施校アンケートの比較	
おわりに	32
「すべての学校に演劇を!」実現するために 2	
田辺素子（（公社）日本劇団協議会教育事業部部長）	
寄稿（日本劇団協議会機関紙「Join」111号より再掲）	34
1. 演劇教室で何を見せるのか?／川名俊生（桐朋中学校・高等学校 国語科教諭）	
2. 高校生の成長に貢献する芸術鑑賞／	
川口浩幸（石川県立加賀高等学校教諭／石川県高文連文化教室常任理事）	
3. AI 時代を生き抜くために必要な力／澤田大樹（TBS ラジオ記者）	
参考資料	38
・「高校生のための巡回公演」鑑賞者（生徒）用アンケート（質問紙／紙面回答用）	
・「高校生のための巡回公演」鑑賞者（生徒）用アンケート（質問紙／オンライン回答用）	
・「高校生のための巡回公演」実施校アンケート兼観劇終了書（質問紙）	
・「高校生のための巡回公演」小規模校ヒアリングシート（質問紙）	
令和 6 年度 実施公演概要（7 団体・7 作品）・鑑賞者（生徒）アンケートの声	43

※執筆者記載のない章・節は、分析受託者である堀川裕介（関西学院大学社会学部）が集計・分析・解説文を担当した。

はじめに

高校生世代の芸術文化環境の格差解消に向けて

福島明夫（（公社）日本劇団協議会専務理事／青年劇場）

（公社）日本劇団協議会では、全国の中学校・高等学校での学校巡回公演事業を1974年度から文化庁国庫補助事業としてスタートさせ、その後1990年度からは芸術文化振興基金助成事業「高校生のための巡回公演」として三十年間実施してきましたが、コロナ禍を機に2023年度は文化庁委託事業（学校における地域活性化のための文化芸術子供鑑賞・体験事業―統括団体による高校・過疎地域等学校派遣モデル事業）として、2024年度は芸術文化振興会の委託事業として実施してきました。

この文化庁への移管を機に、当法人としては高等学校における演劇鑑賞体験事業がさらに広がるために、公演実施に加えて、調査研究活動を独自に行うこととしました。少子化の進行による学校の小規模化が学校の経費負担を困難にしていること、さらに学校での授業時間確保のための学校行事の見直しもあり、劇団、学校の双方にとってこの事業の実施が困難になり、正会員団体による高等学校公演は、1300校を超えていた1990年代から、2016年以降は500校を切る状況となったからです。またそのことで芸術鑑賞機会の地域間格差が拡大していることは毎年の公演調査報告でも明らかでした。そこで昨年度は各都道府県教育委員会に鑑賞事業実施状況についてのアンケートを依頼し、23府県のエデュケーション委員会にご協力いただき、1315票（回収率62.6%）の回答を得ました。またそれに加えて公演を鑑賞した生徒アンケートも実施し、併せて昨年度の報告書にまとめることができました。またそれを受けてのシンポジウムも開催し、あらためて芸術鑑賞の意義や困難を克服する道について話し合ってもきました。

それを受けた今年度は、実施が困難になっている小規模校、また地域的に実施率が低い地域での機会創出に向けて、協議会として独自の取り組みを進め、小規模校10校での実施を行い、同時に今年度事業実施校での学校と生徒アンケートを実施しました。結果は報告書本編をお読みいただければと思いますが、芸術鑑賞機会の偏在とともにその実施が困難になっていることが読み取れるものになっています。

コロナ禍以降、人々の出会いの機会は限られたものになっています。特に高校生たちは、最も多感な時期であるにも関わらず、ネット社会、ネット情報に押し込められ他者との出会いが少なくなっています。それだけに多様な価値観、生き方と出会える演劇鑑賞という場がますます大切なものになっているのではないのでしょうか。私たちは、そこに家庭環境や地域、学校間での格差があってはならないと考えます。

本報告書が、学校、行政関係者のみならず多くの関係者の理解を深めるものとして、本事業推進のための一助となることを期待しています。

第 1 章

報告書の概要

1. 調査全体の概要

(1) 調査研究の趣旨・目的

本報告は独立行政法人日本芸術文化振興会の委託事業として公益社団法人日本劇団協議会（以下、劇団協）が実施した、「令和6年度統括団体による高校・過疎地域等学校派遣モデル事業『高校生のための巡回公演』」の成果報告である。同事業では、①公演活動：劇団協加盟劇団（7団体・7演目）による全国各地の高校における演劇公演、②普及活動：都道府県教育委員会等に対する事業紹介を行っており、公演活動に際して学校並びに鑑賞者生徒に対する質問紙調査を行うことによって事業効果の検証や今後の事業展開に向けての課題抽出を目的としている。多忙の中、ご協力いただいた学校ならびに生徒の皆様には深甚な感謝を申し上げたい。

(2) 質問紙調査の実施方法

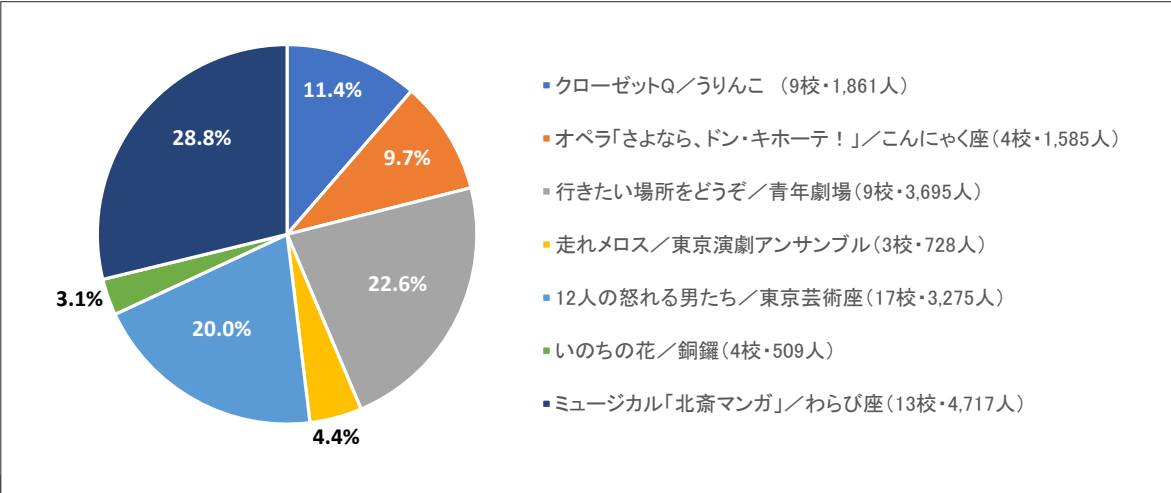
巡回公演を行った学校ならびに鑑賞者の生徒に質問紙を配布して調査を行った。なお、回答者の負担を軽減するため、紙の質問紙だけでなくウェブ回答（Google フォーム）による収集も併せて行った。

巡回公演全体では令和6年5月から12月にかけて94校・89公演を実施したが、調査方法の一貫性を確保するため、鑑賞者（生徒）アンケートについては配布票数の判明している学校に限って集計した。鑑賞者アンケートの詳細は図表1.1～1.3、学校アンケートの詳細は図表1.4～1.5の通りである。

図表 1.1 鑑賞者（生徒）アンケートの概要

調査対象	「高校生のための巡回公演」（7団体・7演目）の鑑賞者生徒
抽出方法	実施校に協力を事前依頼し、学校主体で鑑賞生徒全員に可能な限り実施でき、配布票数の確認が可能な学校を対象校として抽出
調査方法	配布質問紙への記入、もしくはウェブ回答フォーム（Google フォーム）への入力 ※いずれの場合も回答者本人による記入または入力
質問項目	①今回の鑑賞会以前の演劇鑑賞経験の有無、②鑑賞作品への満足度（5段階評価）、③鑑賞作品の家族・友人への推奨度（10段階評価）、④鑑賞後に感じたこと（複数回答8項目）、⑤自由記述 ※計5問
調査時期	2024年5月～2024年12月 ※公演日に合わせて実施
配布票数	58校の鑑賞者のうち29,423票 ※配布票数の判明しているもののみ
有効票数	58校 16,370票 ※回収率55.6%

図表 1.2 鑑賞者（生徒）アンケート回答者における鑑賞作品



図表 1.3 鑑賞者（生徒）アンケート回答者数（都道府県別）

都道府県	学校数	回答者数	都道府県	学校数	回答者数
北海道	5校	1343人（8.2％）	静岡県	2校	24人（0.1％）
青森県	1校	321人（2.0％）	愛知県	3校	1134人（6.9％）
岩手県	2校	476人（2.9％）	三重県	1校	260人（1.6％）
宮城県	2校	635人（3.9％）	京都府	3校	1222人（7.5％）
秋田県	2校	680人（4.2％）	兵庫県	3校	909人（5.6％）
山形県	3校	434人（2.7％）	島根県	1校	396人（2.4％）
福島県	1校	162人（1.0％）	岡山県	3校	1146人（7.0％）
茨城県	1校	259人（1.6％）	広島県	2校	631人（3.8％）
埼玉県	1校	66人（0.4％）	福岡県	2校	440人（2.7％）
神奈川県	2校	176人（1.1％）	長崎県	2校	451人（2.8％）
山梨県	1校	509人（3.1％）	熊本県	3校	460人（2.8％）
長野県	6校	1297人（7.9％）	大分県	2校	1116人（6.8％）
岐阜県	1校	156人（0.9％）	鹿児島県	3校	1667人（10.2％）

図表 1.4 実施校アンケートの概要

調査対象	「高校生のための巡回公演」（7団体・7演目）の実施校
抽出方法	公演事業の実施校全て
調査方法	配布質問紙への記入、もしくはウェブ回答フォーム（Googleフォーム）への入力 ※いずれの場合も担当の先生方による記入または入力
質問項目	①芸術鑑賞会の作品選定において重視していること（複数回答7項目）、②芸術鑑賞会実施に当たっての課題（複数回答5項目）、③自由記述 ※計3問
調査時期	2024年5月～2024年12月 ※公演日に合わせて実施
配布票数	94票
有効票数	93票 ※回収率98.9%

※実施校アンケートについては公演を実施した学校全てに対して行ったため、鑑賞者（生徒）アンケートの58校よりも多くなっている。

図表 1.5 実施校アンケート回答校の構成（都道府県別）※計 93 校

都道府県	回答校数	都道府県	回答校数
北海道	5校	愛知県	3校
青森県	3校	三重県	1校
岩手県	2校	滋賀県	1校
宮城県	2校	京都府	6校
秋田県	3校	兵庫県	3校
山形県	5校	島根県	1校
福島県	1校	岡山県	4校
茨城県	1校	広島県	2校
埼玉県	1校	福岡県	5校
神奈川県	2校	長崎県	4校
山梨県	2校	熊本県	5校
長野県	15校	大分県	2校
岐阜県	3校	宮崎県	1校
静岡県	4校	鹿児島県	6校

(3) 調査研究の実施体制

劇団協内外のメンバーによる実施体制を構築し、調査計画の立案・調査実施方法の検討・関連作業の実施・進捗状況の確認・分析結果の解釈等に係る討議を行った。実施メンバーは図表 1.6 の通りである。

図表 1.6 実施メンバー

役職	氏名	所属等
コーディネーター	田辺素子	(公社)日本劇団協議会 教育事業部部長
アシスタントコーディネーター	林芳弥	音楽座ミュージカル
アドバイザー	松永亜規子	青年劇場
分析受託	堀川裕介	関西学院大学社会学部
事務局	中原恵	(公社)日本劇団協議会

2. 調査結果の要約

(1) 鑑賞者（生徒）アンケートの全体集計結果

鑑賞者（生徒）アンケートは実際に巡回公演を鑑賞した生徒に対して鑑賞後に尋ねたものである。回答負担を軽減するため質問は5問に絞り、率直な回答を促せるよう回答者の個人的属性（性別、年齢、居住地等）に関する質問は盛り込んでいない。第1章で述べた通り、58校から16,370票の有効回答を得た。

鑑賞者（生徒）アンケートで特に注目すべきはQ1の鑑賞経験の有無である。全体の集計結果を見ると39.8%が今回の鑑賞会以前の鑑賞経験が「ある」と回答し、60.2%は「ない」とのことであった。高校在学時点で6割の生徒に鑑賞経験がないという結果は、青少年の芸術鑑賞機会が十分に行き届いていないことを示唆しており、昨年度に続いて本事業の意義を示されたものと考えられる。

また鑑賞作品への満足度は「大変満足」と「満足」を合わせた回答率が全体の82.8%に達し、鑑賞作品の家族・友人への推奨度についても10点満点中8点以上をつけた生徒が全体の58.8%に上るなど、巡回公演への好評が明らかとなった。

具体的な集計値などの詳細は第2章第1節をご覧ください。また後程(3)で言及する小規模校の傾向とは別に、令和5年度の巡回公演時のアンケート結果との比較を補足資料(1)に、また地域別比較と公立・私立比較を補足資料(2)と(3)にそれぞれ掲載した。

(2) 実施校アンケートの全体集計結果

実施校アンケートは公演を実施した学校に対し、芸術鑑賞会に対する意識や実施に際して課題と考える点をアンケート形式で尋ねた。質問内容は①芸術鑑賞会において重視していること、②芸術鑑賞会実施にあたっての困りごと、③今回の公演に対する感想（自由回答）の3問であり、①②について集計分析を行った。回答校は93校である。

結果で注目されるのは公演費用に対する学校側の課題意識の強さである。「芸術鑑賞会において重視していること」では、全体の78.5%（93校中73校）が「⑤費用面」を挙げ、「芸術鑑賞会実施にあたっての困りごと」でも52.7%（93校中49校）が「②予算の確保」を挙げた。それぞれの問の自由回答欄を見ても、「体育館実施が可能かどうか」（重視していることについての自由回答）、「ホール使用時の交通手段（バス）の確保」（困りごとについての自由回答）といった、費用面ともかわりのある内容が見受けられた。

昨今は学校における働き方改革など教職員の業務負担軽減が話題になりがちだが、「困りごと」における関連項目の該当率は、「③日程・時間の確保」が25.8%（93校中24校）、「⑤実施に向けた体制や連絡調整」が29.0%（93校中27校）であり決して低い値とは言えないものの、「②予算の確保」と比べ半数程度の該当数であることから、業務負担以上に予算確保こそ重要課題であることが見て取れる。

実施校アンケート結果の詳細は第2章第2節をご覧ください。また鑑賞者アンケートと同様に、補足資料(1)～(3)に各種比較結果を掲載した。

(3) 小規模校をめぐる状況

本報告書のハイライトと言うべきは94校のうち10校に上る小規模な高校における状況の検証である。なお、小規模な学校の一般的で明確な基準は存在しないが、本事業では関係する整理を参考に1学年120名以下(3学年で360名以下)の学校を「小規模校」として整理し、実施した。

図表 1.7 今年度事業における小規模校の内訳（都道府県別）

都道府県	校数（生徒数）
北海道	2校（計544名）
宮城県	1校（103名）
福島県	1校（245名）
岡山県	1校（320名）
神奈川県	1校（100名）
長崎県	1校（201名）
熊本県	2校（510名）
鹿児島県	1校（353名）
計	10校（2,376名）※1校平均237.6名

背景には、令和5年度に実施した全国23府県・1,278校の学校調査結果がある。同調査では学校の区分や規模によって芸術鑑賞会の実施状況に格差のあることが確認された。具体的には、芸術鑑賞会（演劇以外を含む）の実施率が全体平均で68.2%（集計母数1,278校）であるのに対し、生徒数100人未満の学校では51.1%（集計母数221校）であり、また演劇以外を含む芸術鑑賞会を実施している学校の中で「演劇の芸術鑑賞会」を実施している学校は、全体平均で52.9%（集計母数871校）、生徒数100人未満で29.2%（集計母数113校）と、大きな差が見られた。

また生徒1人あたりの公演料負担も全体平均では2098.5円（集計母数412校）であるのに対し、生徒数100人未満では2288.3円（集計母数12校）とやや高額であった。同調査では生徒数100人未満の学校に定時制高校や特別支援学校が含まれるが、全日制の学校だけに絞って集計すると、生徒1人あたり公演料負担は平均3210.0円となり全体集計と比べて大きな格差が見られた。

こうした課題認識から、今年度は前述した「1学年120名以下」の定義による小規模校での公演に新たに取り組み、そこに注目して大中規模の学校との比較を行った。本事業での小規模校は図表1.7の通り、鑑賞者数は最少100名、最大374名、1校あたり平均で237.6名であった。

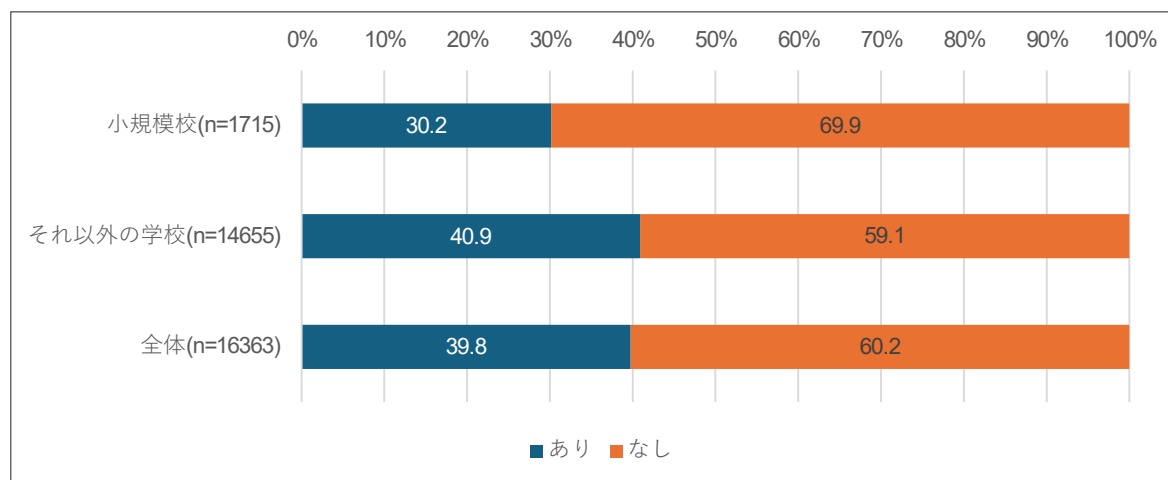
鑑賞者（生徒）アンケートでは、小規模校で今回の公演以前に演劇鑑賞経験が「ある」と答えた生徒は30.2%となり、大中規模校の40.9%、全体集計の39.8%と比べて低い値となった。昨年度の23府県調査と同様に小規模校では演劇鑑賞の機会が乏しい実態が浮き彫りとなった。

これに対し、鑑賞作品への満足度（「大変満足」「満足」の合算割合）は小規模校が89.8%に上り、大中規模校の82.1%、全体集計の82.9%を上回る結果となった。また鑑賞作品の家族・友人への推奨度についても10点満点中8点以上をつけた生徒は小規模校で67.2%と、大中規模校の57.9%、全体集計の58.8%を上回った（平均点では小規模校：8.1点、大中規模校：7.6点、全体：7.6点）。

これらの結果を総合すると、小規模校の生徒においては演劇の鑑賞経験が相対的に乏しいものの、こうした鑑賞会によって芸術鑑賞の機会や喜びがもたらされる効果の高い可能性のあることが示唆される。

そのほかの詳細な数値については第2章第2節を参照されたい。

図表 1.8 今回の鑑賞会以前における演劇鑑賞経験の有無（単位：％）



※こちらでは無回答を除いて集計しているため全体の数値において単純集計結果とは値が異なる。

続いて実施校アンケートにおける小規模校の傾向を紹介する。こちらでは集計母数が少ないためパーセンテージでの比較には難があるが、全体でも課題となっていた費用面の問題が小規模校では大中規模校よりも高く認識されている結果が見られた。具体的には、「芸術鑑賞会において重視していること」の「⑤費用面」において、大中規模校は83校中63校該当（該当率75.9%）なのに対し、小規模校では10校すべてが該当。また「芸術鑑賞会実施にあたっての困りごと」の「②予算の確保」では、大中規模校が83校中39校該当（該当率47.0%）に対して小規模校ではやはり10校すべてが該当した。一般化するにはサンプルが少なすぎるが、小規模校における課題の一端を示すものと言えそうである。

詳細については第3章第2節を参照されたい。

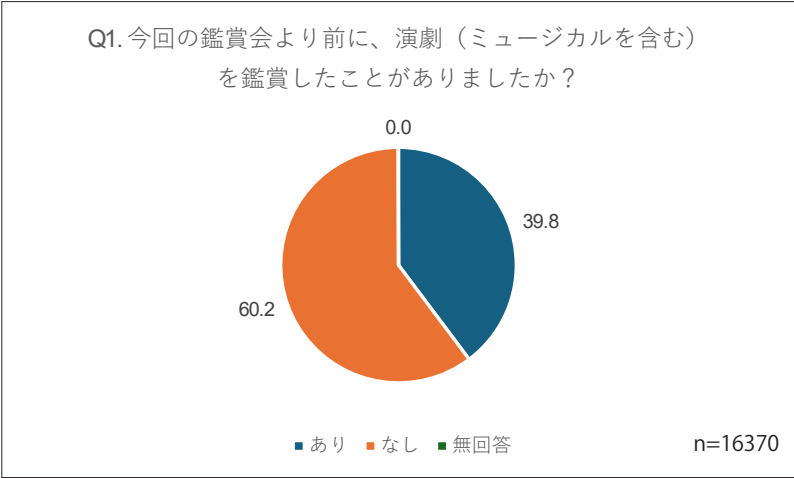
第 2 章
「高校生のための巡回公演」
鑑賞者(生徒)アンケート
集計・分析結果

1. 全体集計

(1) 今回の鑑賞会以前における演劇鑑賞経験の有無

質問紙の Q1 として、今回の鑑賞会以前に演劇（ミュージカルを含む）を見たことがあるかを尋ねた。結果は図表 2.1 の通り、鑑賞経験のある生徒が全体の 39.8%、ない生徒が 60.2% となった。この結果をそのまま受け止めるとすれば、鑑賞者生徒の 6 割強が高校進学までの間に演劇に触れる機会がなかったことが見て取れ、高校での演劇鑑賞教室には芸術文化に触れる機会を提供する意義があることを示すものと言えるだろう。

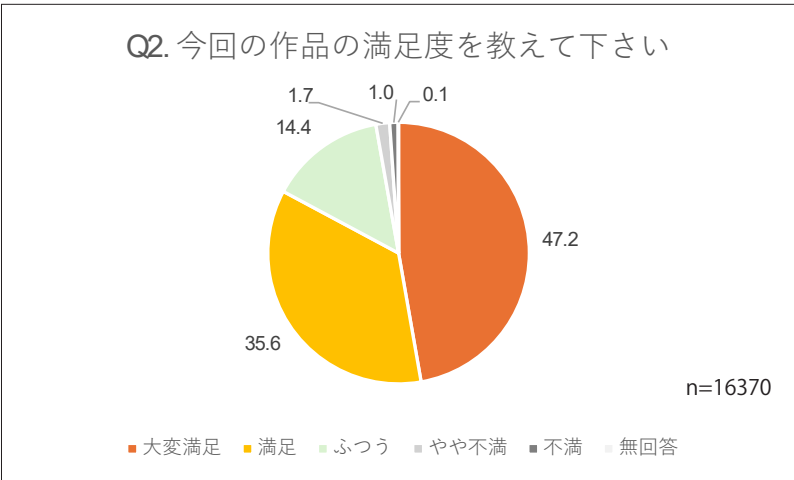
図表 2.1 今回の鑑賞会以前における演劇鑑賞経験の有無（単位：％）



(2) 鑑賞作品への満足度

Q2 では各生徒が鑑賞した演目について、5 段階評価で満足度を尋ねた。結果は図表 2.2 の通りで、「不満」「やや不満」は合わせても 2.7% にとどまり、逆に合計で 8 割強の回答者が「満足」「大変満足」と回答した。

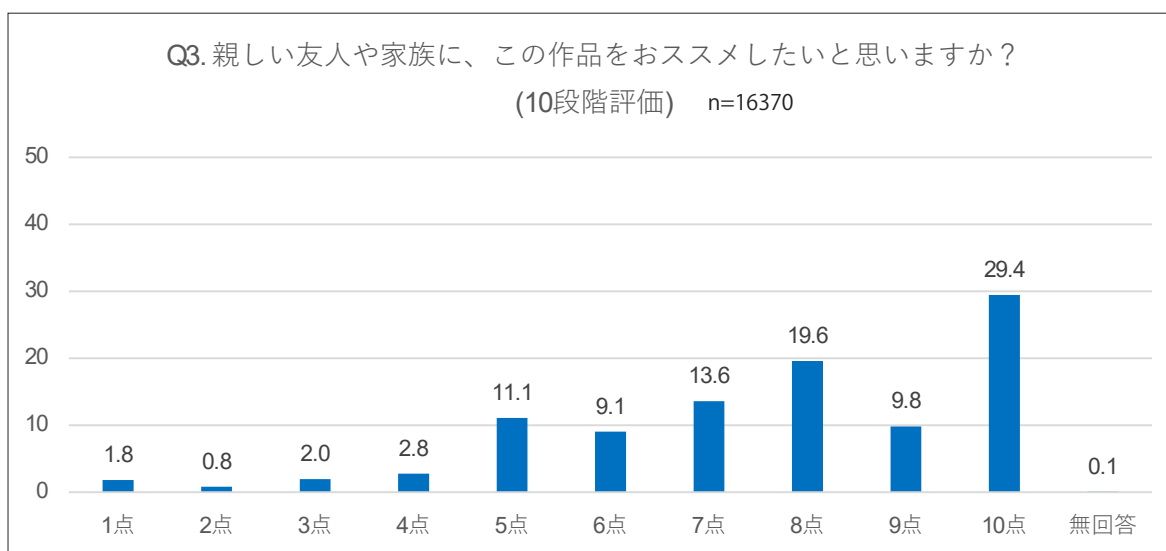
図表 2.2 鑑賞作品への満足度（単位：％）



(3) 鑑賞作品の家族・友人への推奨度

Q3 では今回鑑賞した作品について、親しい友人や家族にどの程度推奨するか 1 点から 10 点の間で尋ねた。結果は図表 2.3 の通りで、平均は 7.6 点、8 点以上は全体の 58.8% に及んだ。全体として作品の良さが評価された結果とみてよいだろう。

図表 2.3 鑑賞作品の家族・友人への推奨度 (単位：%)



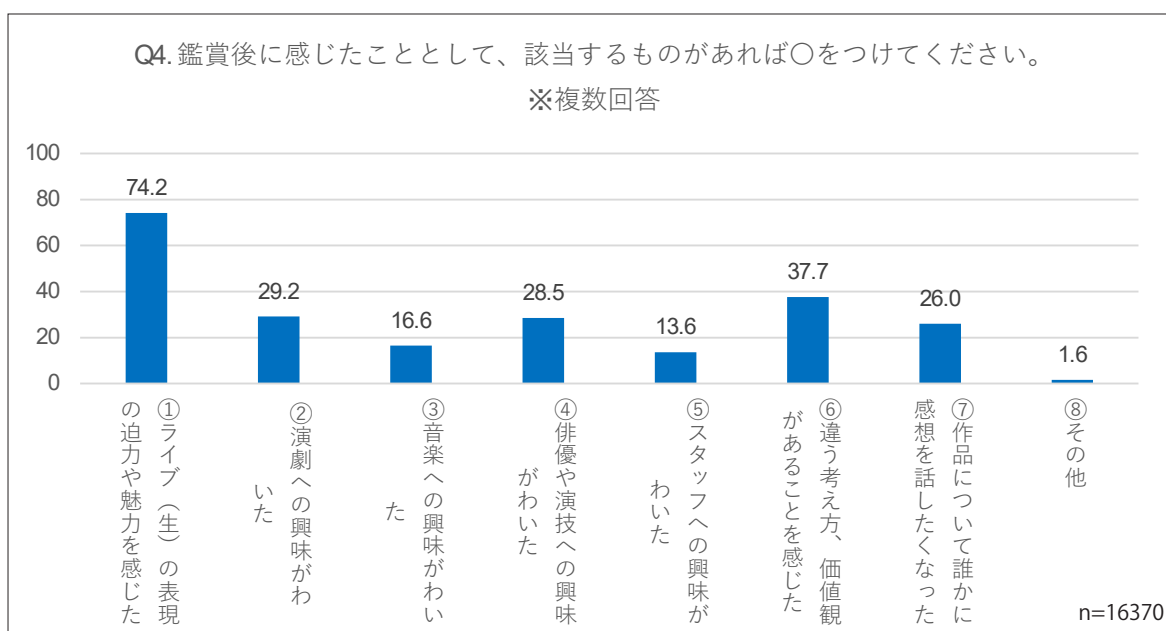
(4) 鑑賞後に感じたこと

Q4では鑑賞後に感じたことを複数回答8項目で尋ねた。最も該当率が高かったのは「①ライブ(生)の表現の迫力や魅力を感じた」(74.2%)であり、これは本格的な演劇体験が生徒の心に感動を与える力を持っていたことを示すものであろう。

次に回答が集まったのは「⑥違う考え方、価値観があることを感じた」(37.7%)である。これもすべての演目で感じ取れる事柄ではあるが、演劇を通じて多様な生き方のあることを生徒が感じ取った結果と考えられる。

興味深いのは上演内容に関する回答だけではなく、「②演劇への興味がわいた」(29.2%)、「④俳優や演技への興味がわいた」(28.5%)など、演劇というジャンルそのものやその担い手の人々に注目して鑑賞した生徒が少なからずいたことである。学校の中には文化祭などの学校行事として演劇を行う学校や、演劇部のある学校も多々あることから、生徒自身が自分事として演劇への向き合い方を学ぶ機会になったことが考えられ、またそれ以外の生徒にとっても今回の鑑賞経験を機会として将来の演劇鑑賞や担い手の裾野を広げていくことに繋がっていくことが考えられる。

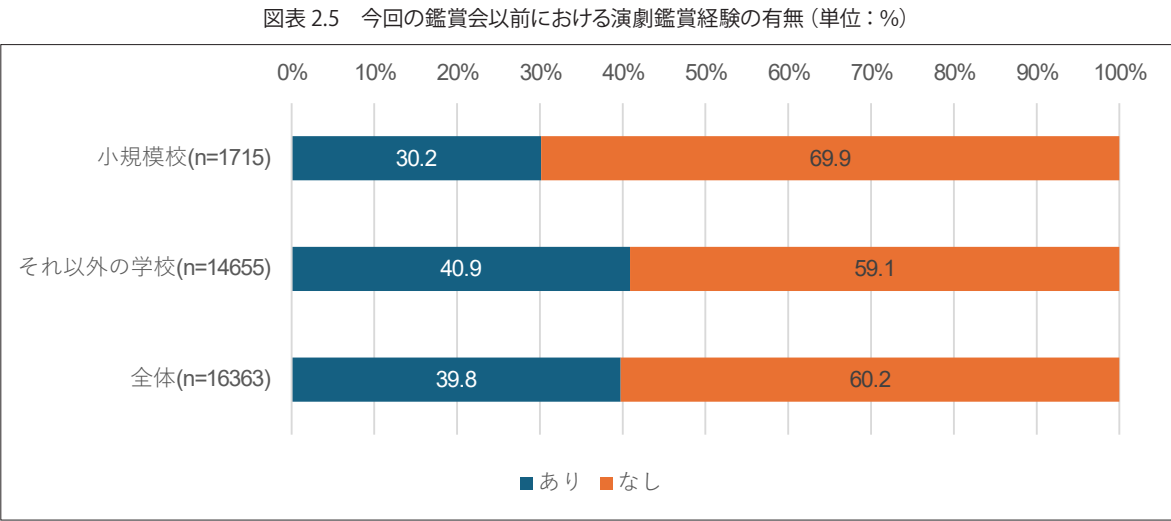
図表 2.4 鑑賞後に感じたこと (複数回答, 単位：%)



2. 小規模校の傾向分析

(1) 今回の鑑賞会以前における演劇鑑賞経験の有無

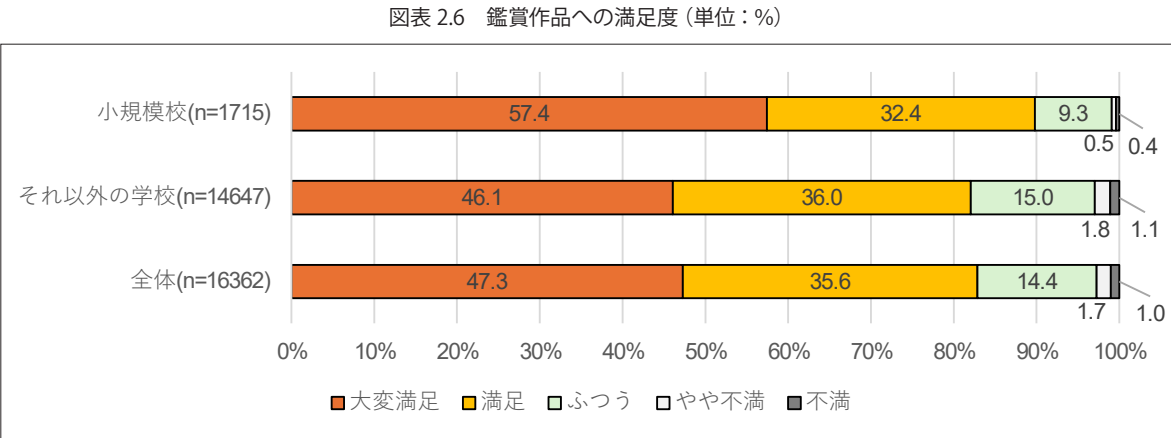
図表 2.5 にある通り、小規模校では今回の鑑賞会以前に演劇鑑賞経験のある生徒は 30.2%であり、全体平均の 39.8%、大中規模校の 40.9%と比べて低い値となった。昨年度調査でも確認された通り、小規模校は演劇鑑賞の機会が乏しいことが見て取れる。



※既出図表 1.8 の再掲。本図表では無回答を除いて集計。
※参考までにχ² 検定を行ったところ危険率 0.1%水準で有意な偏りが見られた。

(2) 鑑賞作品への満足度

小規模校では「大変満足」「満足」が合わせて 89.8%に上り、大中規模の学校（82.1%）や全体（82.9%）を上回る結果となった。元々演劇鑑賞の機会が少ないことが手伝ってか、あるいは少人数での鑑賞となったことによる緊密さによるものか、鑑賞作品に対して大いに感化された結果だと考えられる。

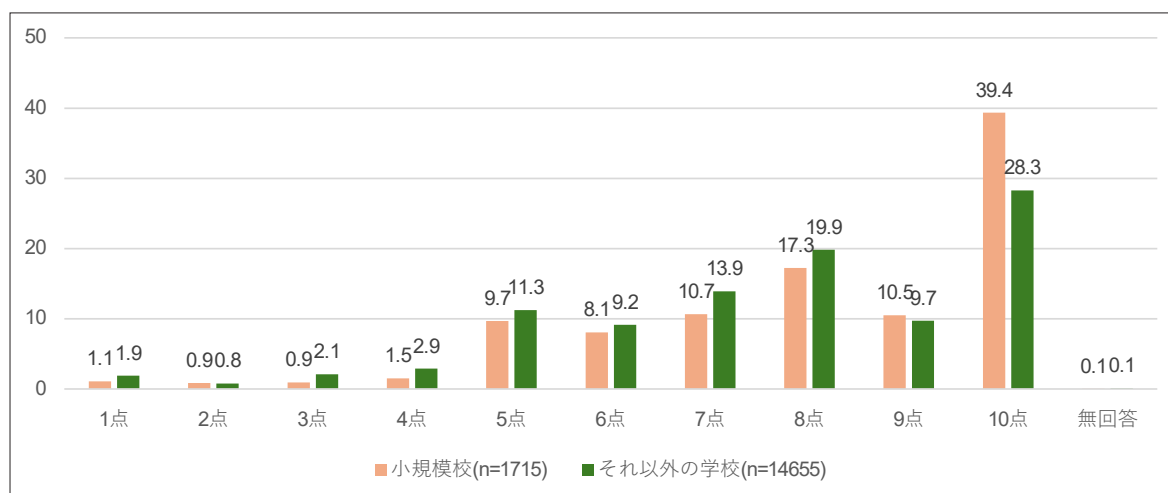


※本図表では無回答を除いて集計。
※参考までにχ² 検定を行ったところ危険率 0.1%水準で有意な偏りが見られた。

(3) 鑑賞作品の家族・友人への推奨度

平均点では小規模校が8.1点、大中規模校では7.6点となっており、小規模校の方が家族・友人への推奨度が高い。特に小規模校では10点満点をつけた生徒が大中規模校よりも10ポイント以上上回っており、鑑賞経験に対して非常に満足したことが見て取れた。

図表 2.7 鑑賞作品の家族・友人への推奨度 (単位：%)

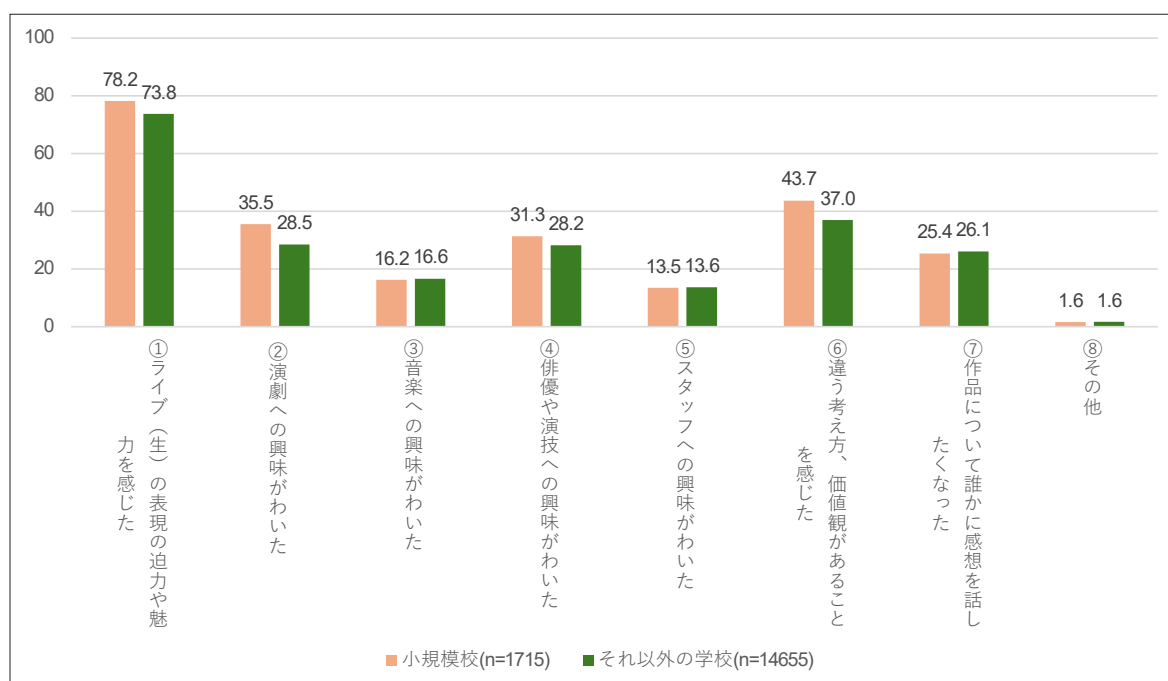


※参考までに平均値の差の検定手法であるt検定を行ったところ危険率 0.1%水準の有意差が見られた。

(4) 鑑賞後に感じたこと

学校規模による該当率の順位には差がなく、「①ライブ(生)の表現の迫力や魅力を感じた」が最多であり、「⑥違う考え方、価値観があることを感じた」、「②演劇への興味がわいた」などと続いた。もっとも多くの項目で小規模校の該当率が高く、項目①②④⑥では統計的検定でも有意な偏りが見られた。

図表 2.8 鑑賞後に感じたこと (複数回答, 単位：%)



※参考までにχ²検定を行ったところ項目①②④⑥で有意な偏りが見られた。

【コラム】 χ^2 検定について

クロス集計において説明変数（性別や年齢層などのカテゴリ）によって回答分布に偏りがあるか否かを検証する統計的手法の 1 つである。例えば表 A では A・B グループどちらもイヌ派とネコ派が 1：2 であるためグループの違いに関わりなく犬猫の好き嫌いは同じ分布となっている（これを統計学的には “独立である” という）。しかし表 B の場合 C グループはイヌ派・ネコ派が同数だが、D グループではネコ派にかなり偏っている。このように全体としては同じ分布であってもグループ別にみると偏りが見られる場合、統計学的には “独立ではない”（グループによる偏りが存在する）とされる。詳細な計算方法は割愛するが、この偏り具合を評価するのが χ^2 検定である。ただし同手法はサンプル数が多いほど有意になりやすく、また本来的にはランダムサンプリングによるデータを用いてこそ妥当な結果を導けるものであるため、今回の分析はあくまで参考と考えられたい。

表 A 偏りが無い（独立である）場合

	A グループ	B グループ	計
イヌ派	50人	50人	100人
ネコ派	100人	100人	200人
計	150人	150人	300人

表 B 偏りがある（独立でない）場合

	C グループ	D グループ	計
イヌ派	75人	25人	100人
ネコ派	75人	125人	200人
計	150人	150人	300人

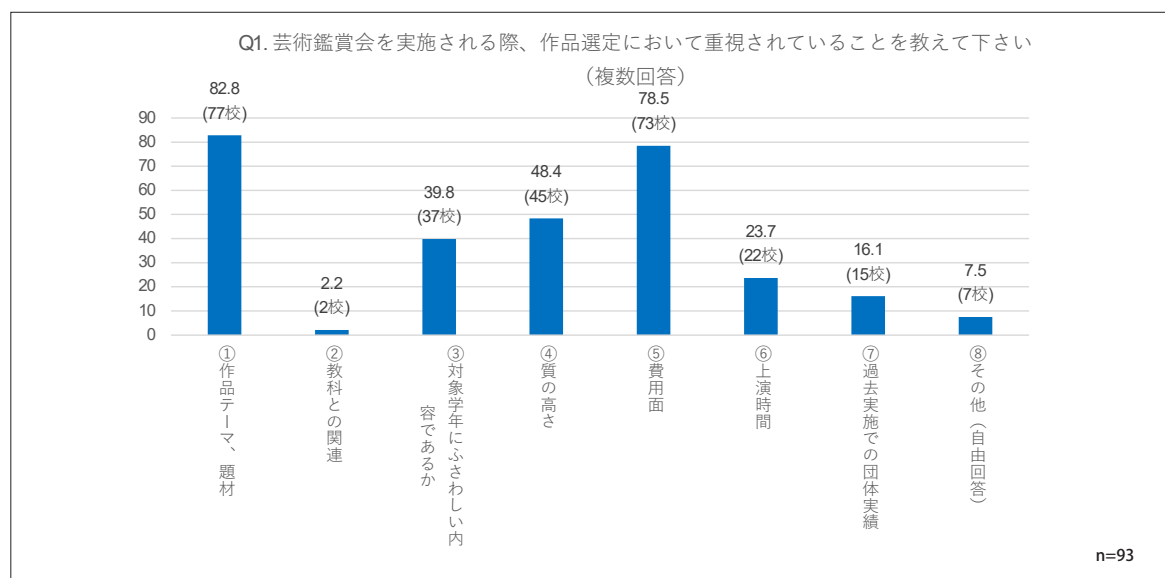
第 3 章
「高校生のための巡回公演」
実施校アンケート
集計・分析結果

1. 全体集計

(1) 芸術鑑賞会において重視していること

7項目について複数回答で尋ねたところ、「①作品テーマ、題材」の該当率が最も高く(82.8%)、次いで「⑤費用面」(78.5%)となった。自由回答では「本校体育館を会場にしての実施は可能か」、「体育館実施が可能かどうか」といった回答が見られ、開催場所の確保が課題として認識されていることがうかがわれた。

図表 3.1 芸術鑑賞会において重視していること(複数回答, 単位: %)

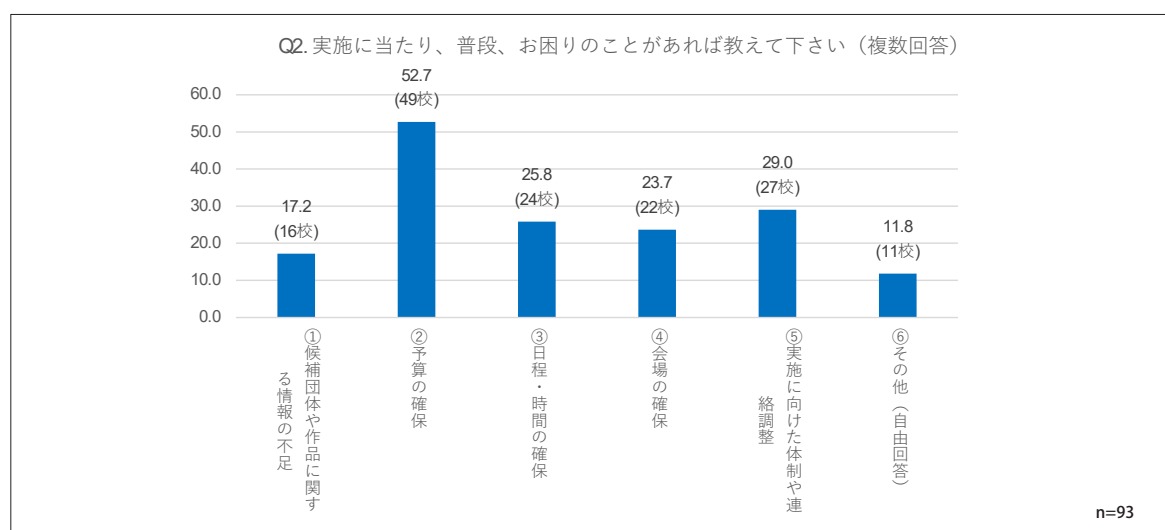


※集計母数が少ないため、パーセンテージ表記に加えて度数(該当校数)を併記した

(2) 芸術鑑賞会実施にあたっての困りごと

5項目について複数回答で尋ねたところ、「②予算の確保」が52.7%と最も該当率が高く、「⑤実施に向けた体制や連絡調整」(29.0%)、「③日程・時間の確保」(25.8%)、「④会場の確保」(23.7%)が続いた。自由回答では「下見に行く日程調整が難しい」、「ホール使用時の交通手段(バス)の確保」、など実施準備に関する課題や、「良い内容のものが多く、選ぶことに苦労します」、「選り好みがある中での作品選定の難しさ」、「上演してくださる劇団探し、演目が本校の生徒にふさわしいかの見極め」など演目選定に関する課題が挙げられた。

図表 3.2 芸術鑑賞会実施に当たっての困りごと(複数回答, 単位: %)



※集計母数が少ないため、パーセンテージ表記に加えて度数(該当校数)を併記した。

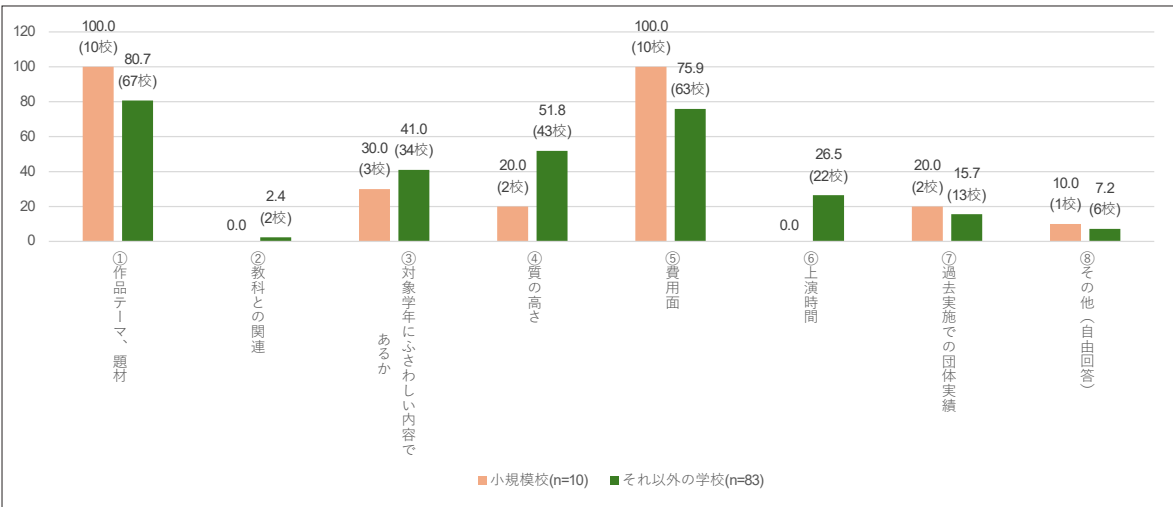
2. 小規模校の傾向分析

鑑賞者（生徒）アンケートと同様に、小規模校と大中規模校の比較を行った。なお回答校中の小規模校は鑑賞者（生徒）アンケートと同じ10校であり、パーセンテージでの集計では数値が過大・過少に表れるため、本結果を小規模校一般の傾向とみなすことはできない。あくまで参考としてご覧いただきたい。

（1）芸術鑑賞会において重視していること

小規模校では10校すべてにおいて「①作品テーマ、題材」、「⑤費用面」に該当した。後述の図表3.4の結果と共通して予算面の課題が強く意識されているものとみられる。一方で「③対象学年にふさわしい内容であるか」、「④質の高さ」については大中規模の学校に比べ該当率が低い結果となった。

図表 3.3 芸術鑑賞会において重視していること（複数回答，単位：％）

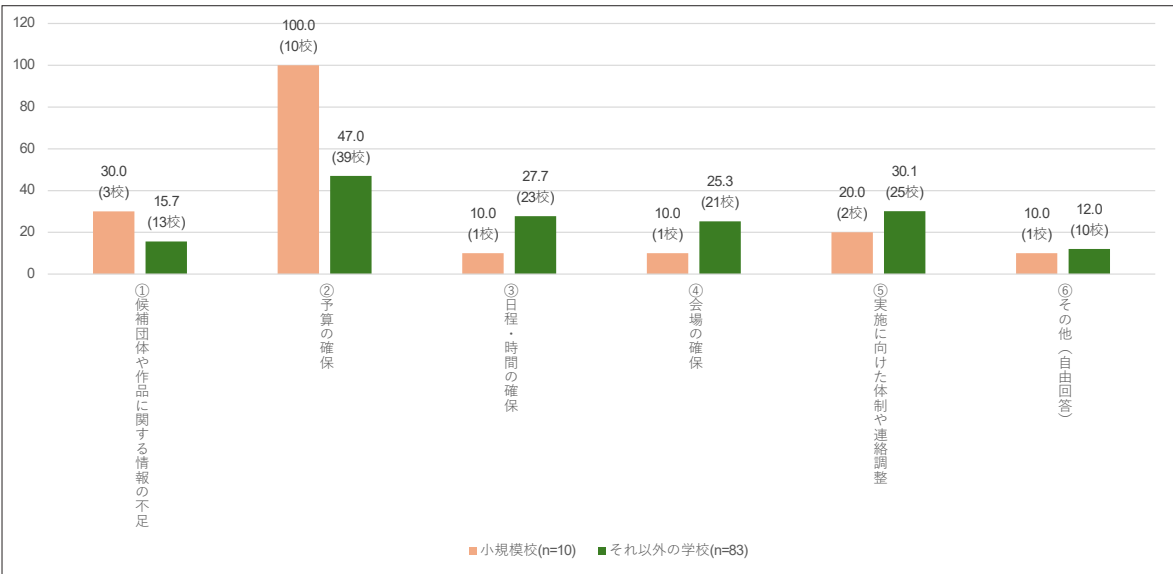


※集計母数が少ないため、パーセンテージ表記に加えて度数（該当校数）を併記した。

（2）芸術鑑賞会実施にあたっての困りごと

小規模校では10校すべてで「②予算の確保」に該当しており、芸術鑑賞会の実施に当たって予算面が最大の課題であることが見て取れる。また「①候補団体や作品に関する情報の不足」も10校中3校と比較的高い該当数となった。

図表 3.4 芸術鑑賞会実施に当たっての困りごと（複数回答，単位：％）



※集計母数が少ないため、パーセンテージ表記に加えて度数（該当校数）を併記した。

補足資料1

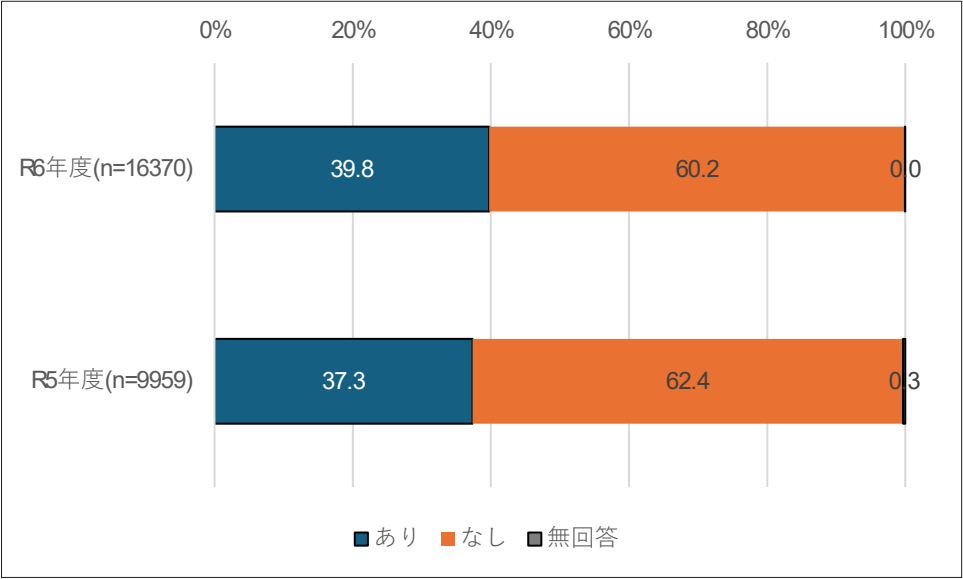
令和 5 年度調査との比較

1. 鑑賞者（生徒）アンケートの比較

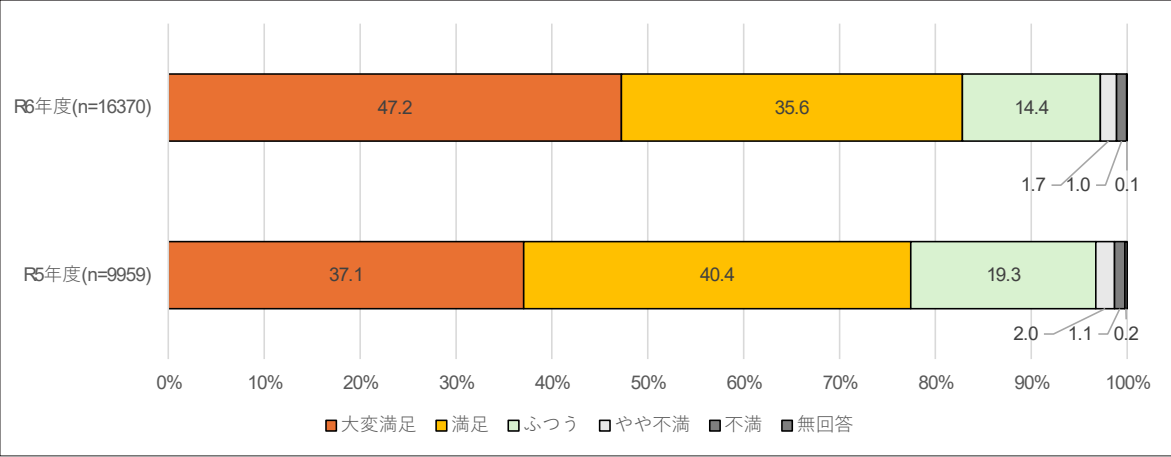
令和 5 年度巡回公演での鑑賞者（生徒）アンケートとの比較を掲載する。昨年度と比べ満足度・推奨度で肯定的な回答が多い傾向が見られたが、演目や実施校が異なることから単純に増減として解釈することはできない。あくまで参考としてご覧いただきたい。

鑑賞経験の有無や鑑賞後に感じたことについては、どちらの年度もほぼ同様の結果となった。

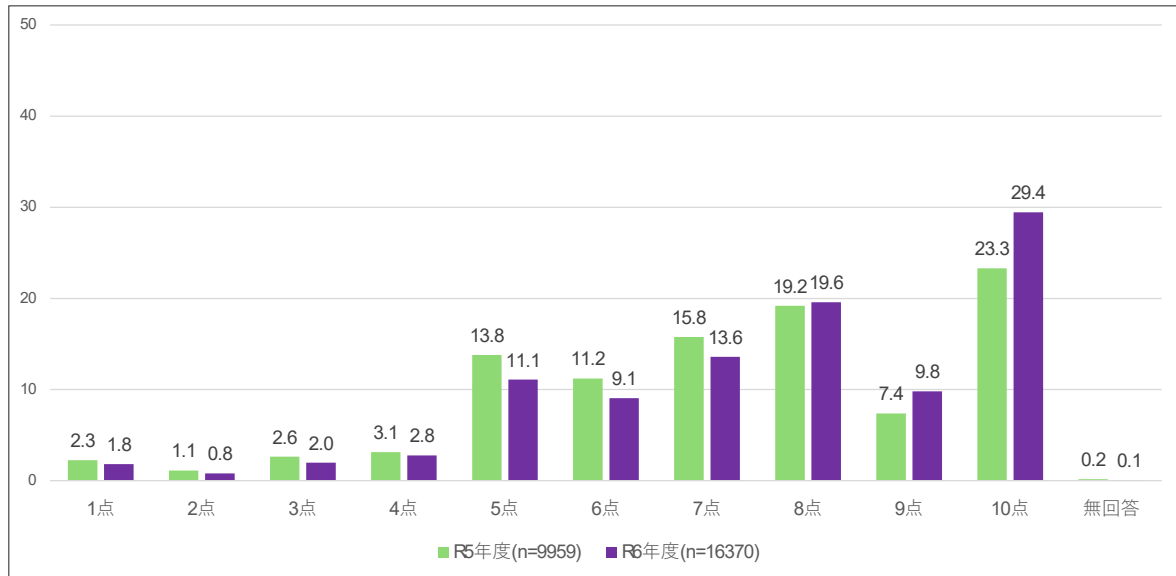
(1) 今回の鑑賞会以前における演劇鑑賞経験の有無（単位：％）



(2) 鑑賞作品への満足度（単位：％）



(3) 鑑賞作品の家族・友人への推奨度（単位：％）

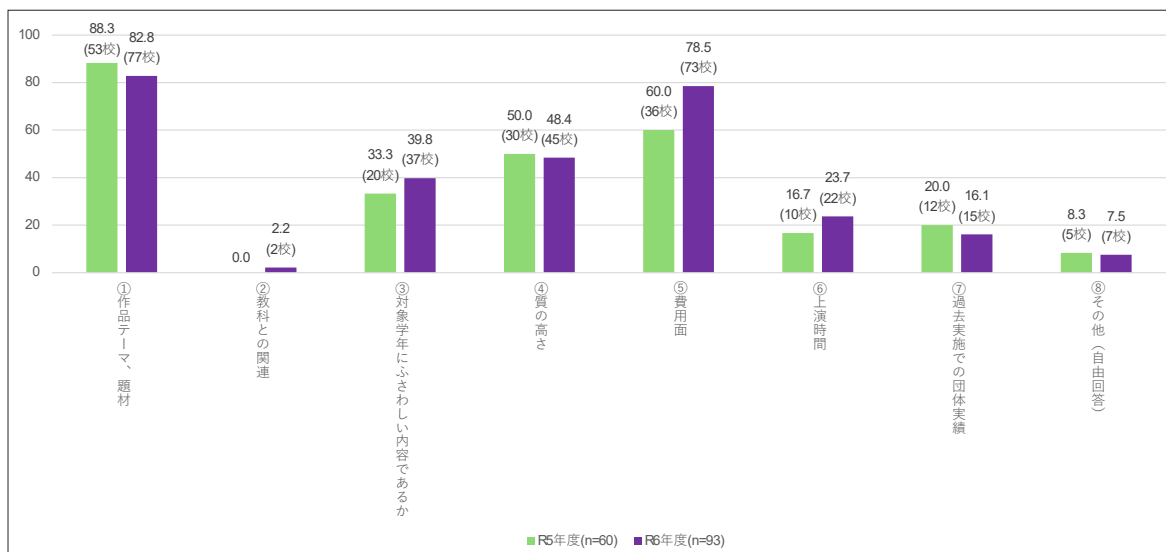


(4) 鑑賞後に感じたこと（複数回答，単位：％）



2. 実施校アンケートの比較

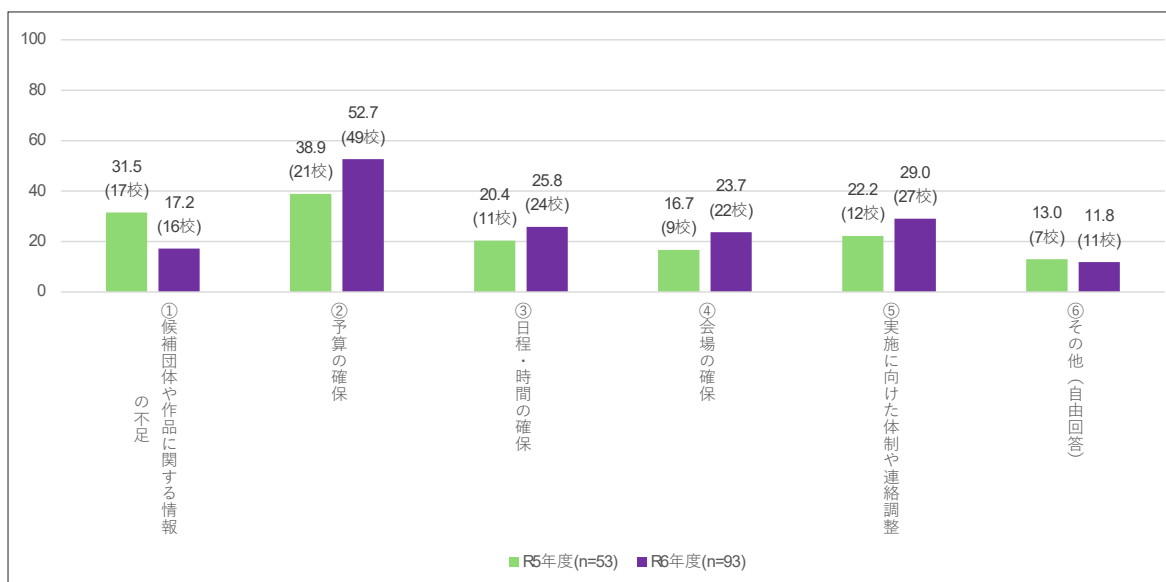
(1) 芸術鑑賞会において重視していること（複数回答，単位：％）



※集計母数が少ないため、パーセンテージ表記に加えて度数（該当校数）を併記した。

令和5年度巡回公演での実施校アンケートと比較すると、該当率1位が「①作品テーマ、題材」である点は変わらないが、該当率2位の「⑤費用面」が令和6年度において高めに出来ていた。実施校の中身が年度によって異なるため経年変化とみることはできないが、費用面に対する注目の高さがうかがわれ、小規模校実施が加わった影響とも考えられる。

(2) 芸術鑑賞会実施にあたっての困りごと（複数回答，単位：％）



※集計母数が少ないため、パーセンテージ表記に加えて度数（該当校数）を併記した。

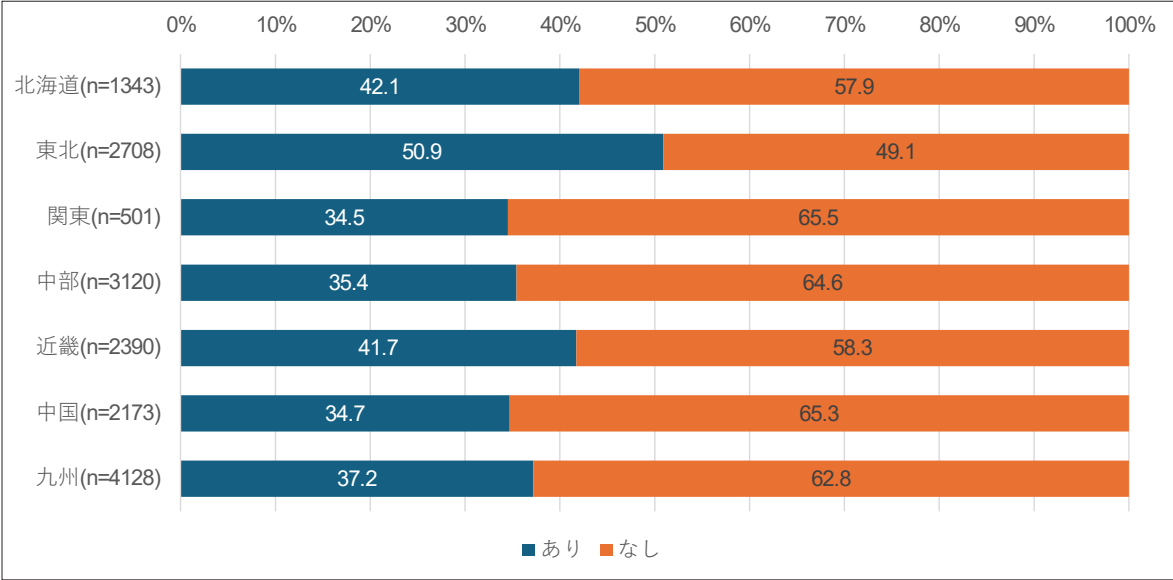
同様の結果は困りごとにおいても見られ、「②予算の確保」の該当率が令和5年度より令和6年度で高めに出了。他方「①候補団体や作品に関する情報の不足」の該当率は低めとなった。

これら実施校アンケートにおける費用面・予算面への該当率の高さは、単なる実施校の構成の違いの可能性もあるが、今年度は小規模校が含まれたためこうした結果になったとも考えられる。

補足資料2 地域別比較

1. 鑑賞者（生徒）アンケートの比較

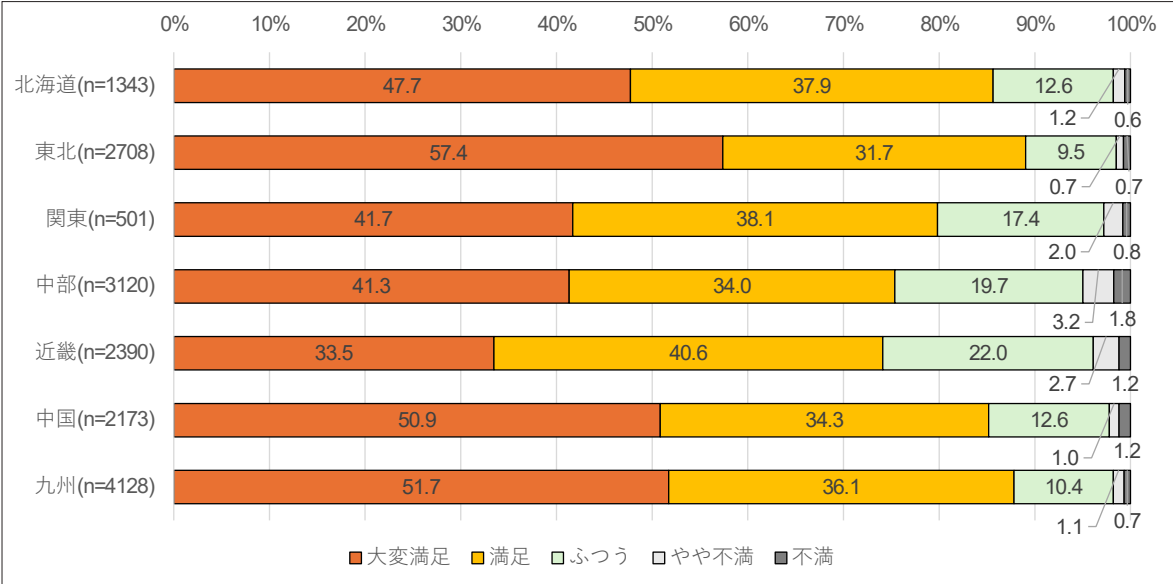
(1) 今回の鑑賞会以前における演劇鑑賞経験の有無（単位：％）



※本図表では無回答を除いて集計。

東北地方が顕著に鑑賞経験ありの割合が高い。県別にみると秋田県（66.2%）、青森県（60.1%）、山形県（55.5%）が平均を押し上げている。また静岡県（75.0%）、三重県（60.8%）も高い実施率となっていた。

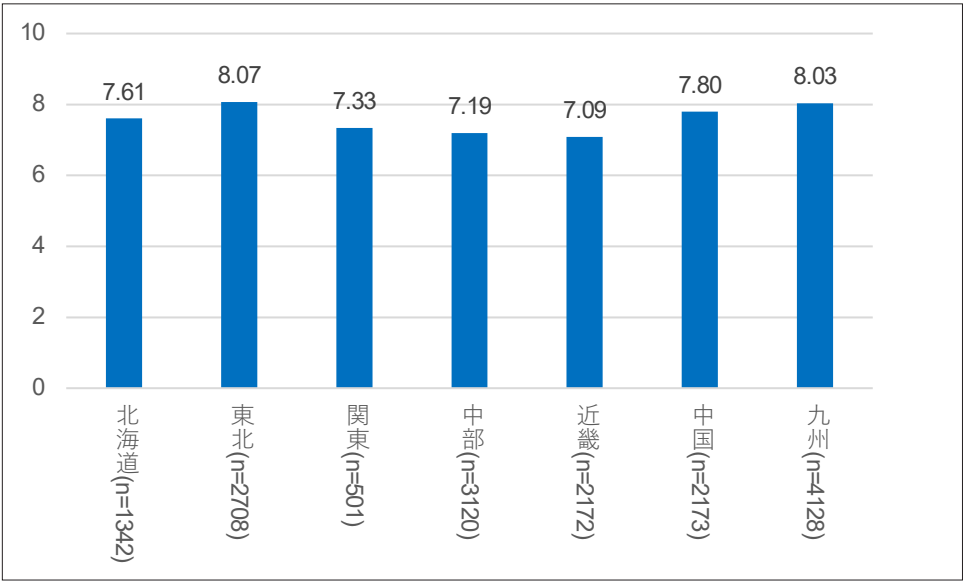
(2) 鑑賞作品への満足度（単位：％）



※本図表では無回答を除いて集計。

東北・中国・九州において満足度が高い傾向が見受けられた。

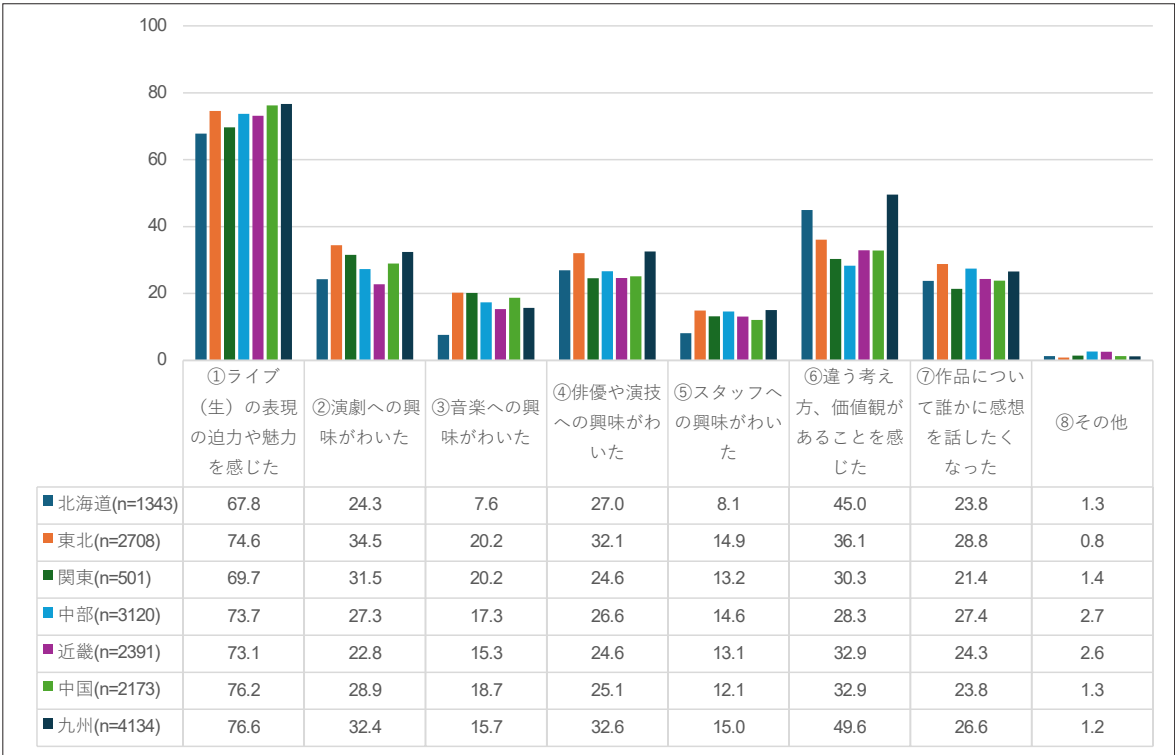
(3) 鑑賞作品の家族・友人への推奨度（単位：点）



※ 10 点満点による平均点である。本図表では無回答を除いて集計。

東北・中国・九州において推奨度が高い。満足度の高さと合致した結果と言えよう。

(4) 鑑賞後に感じたこと（複数回答，単位：％）



※本図表では無回答を除いて集計。

概ね地域差は見受けられないが、九州では多くの項目で他の地域より該当率が高く、「④俳優や演技への興味がわいた」や「⑥違う考え方、価値観があることを感じた」において顕著であった。また⑥については北海道の該当率も高い値を示した。

2. 実施校アンケートの比較

(1) 芸術鑑賞会において重視していること（複数回答，単位：％）

	北海道(n=5)	校数	東北(n=16)	校数	関東(n=4)	校数	中部(n=27)	校数
①作品テーマ、題材	80.0%	4校	87.5%	14校	50.0%	2校	81.5%	22校
②教科との関連	0.0%	0校	0.0%	0校	0.0%	0校	3.7%	1校
③対象学年にふさわしい内容であるか	20.0%	1校	25.0%	4校	100.0%	4校	33.3%	9校
④質の高さ	40.0%	2校	50.0%	8校	0.0%	0校	40.7%	11校
⑤費用面	100.0%	5校	81.3%	13校	100.0%	4校	63.0%	17校
⑥上演時間	20.0%	1校	25.0%	4校	0.0%	0校	29.6%	8校
⑦過去実施での団体実績	20.0%	1校	6.3%	1校	0.0%	0校	14.8%	4校
⑧その他（自由回答）	0.0%	0校	0.0%	0校	25.0%	1校	7.4%	2校
	近畿(n=11)	校数	中国(n=7)	校数	九州(n=23)	校数		
①作品テーマ、題材	72.7%	8校	85.7%	6校	91.3%	21校		
②教科との関連	0.0%	0校	0.0%	0校	4.3%	1校		
③対象学年にふさわしい内容であるか	54.5%	5校	14.3%	1校	52.2%	12校		
④質の高さ	72.7%	8校	42.9%	3校	56.5%	13校		
⑤費用面	100.0%	11校	85.7%	6校	73.9%	17校		
⑥上演時間	36.4%	4校	0.0%	0校	21.7%	5校		
⑦過去実施での団体実績	27.3%	3校	0.0%	0校	26.1%	6校		
⑧その他（自由回答）	9.1%	1校	14.3%	1校	8.7%	2校		

※集計母数が少ないため、パーセンテージ表記に加えて度数（該当校数）を併記した。

多くの地域において「①作品テーマ、題材」と「⑤費用面」をピークとして、「④質の高さ」や「⑥上演時間」がそれに続く傾向がみられるが、「③対象学年にふさわしい内容であるか」については関東、近畿、九州などにおいて他の地域より高めの数値が出ていた。ただし各地の集計母数が少なすぎるため、あくまで参考と考えられたい。

(2) 実施にあたっての困りごと（複数回答，単位：％）

	北海道(n=5)	校数	東北(n=16)	校数	関東(n=4)	校数	中部(n=27)	校数
①候補団体や作品に関する情報の不足	20.0%	1校	6.3%	1校	25.0%	1校	11.1%	3校
②予算の確保	80.0%	4校	87.5%	14校	75.0%	3校	18.5%	5校
③日程・時間の確保	20.0%	1校	43.8%	7校	25.0%	1校	14.8%	4校
④会場の確保	20.0%	1校	18.8%	3校	0.0%	0校	22.2%	6校
⑤実施に向けた体制や連絡調整	20.0%	1校	31.3%	5校	25.0%	1校	51.9%	14校
⑥その他（自由回答）	20.0%	1校	0.0%	0校	25.0%	1校	7.4%	2校
	近畿(n=11)	校数	中国(n=7)	校数	九州(n=23)	校数		
①候補団体や作品に関する情報の不足	27.3%	3校	42.9%	3校	17.4%	4校		
②予算の確保	45.5%	5校	57.1%	4校	60.9%	14校		
③日程・時間の確保	36.4%	4校	42.9%	3校	17.4%	4校		
④会場の確保	45.5%	5校	42.9%	3校	17.4%	4校		
⑤実施に向けた体制や連絡調整	27.3%	3校	14.3%	1校	8.7%	2校		
⑥その他（自由回答）	36.4%	4校	0.0%	0校	13.0%	3校		

※集計母数が少ないため、パーセンテージ表記に加えて度数（該当校数）を併記した。

多くの地域で「②予算の確保」をピークとして「③日程・時間の確保」、「④会場の確保」など周辺項目になだらかに分布する傾向が見られたが、中部地方だけは「⑤実施に向けた体制や連絡調整」が特に高く、他地域で高い「②予算の確保」や「③日程・時間の確保」の該当率は低かった。

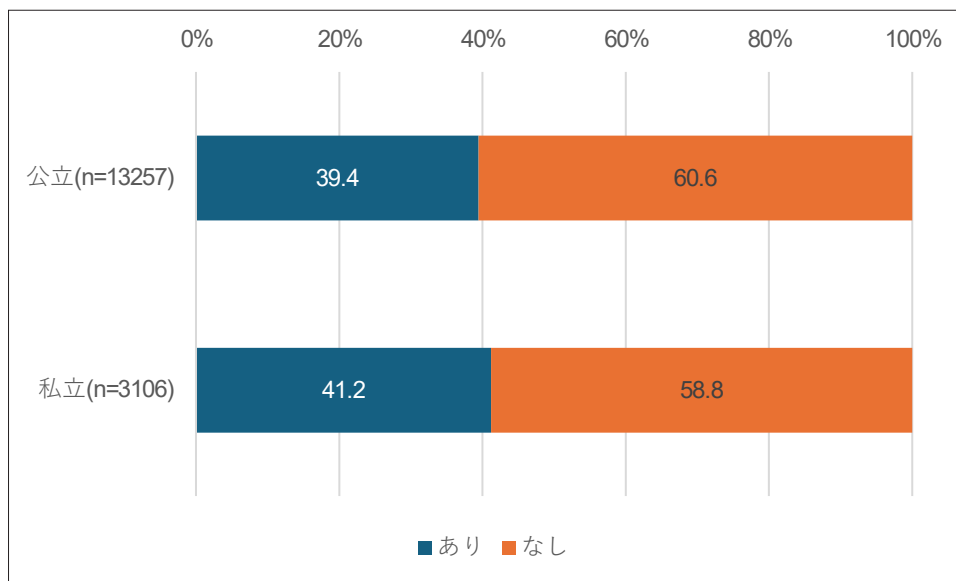
補足資料3

公立・私立による比較

1. 鑑賞者（生徒）アンケートの比較

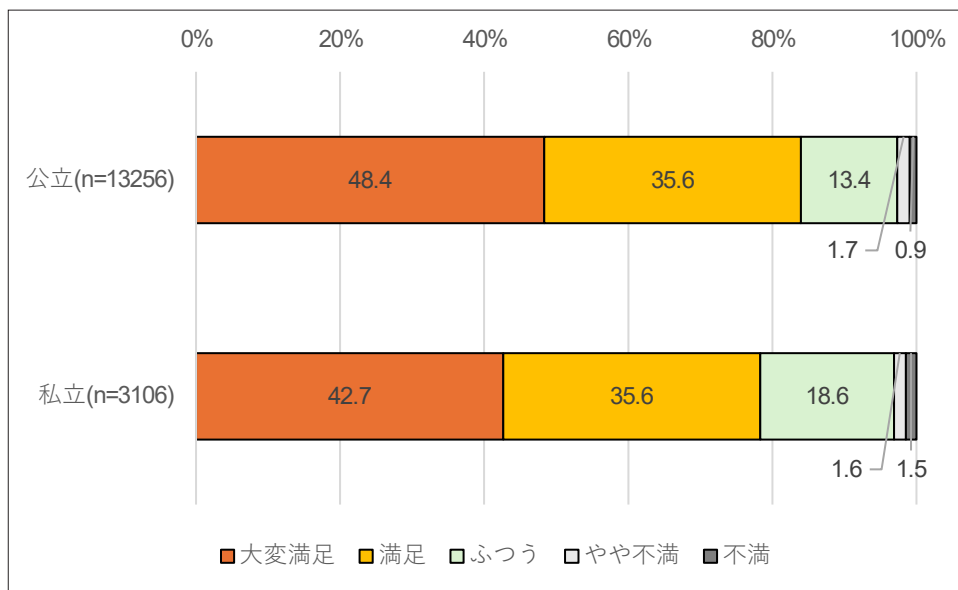
公立校と私立校により演劇鑑賞経験に違いがあるか検討したが、いずれの項目についても顕著な差は見受けられなかった。

(1) 今回の鑑賞会以前における演劇鑑賞経験の有無（単位：％）



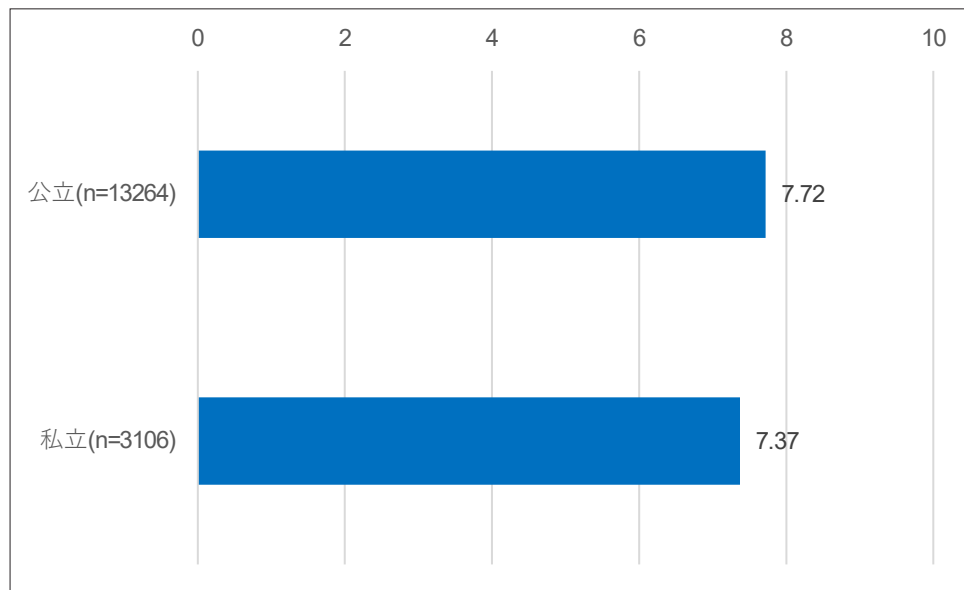
※本図表では無回答を除いて集計。

(2) 鑑賞作品への満足度（単位：％）



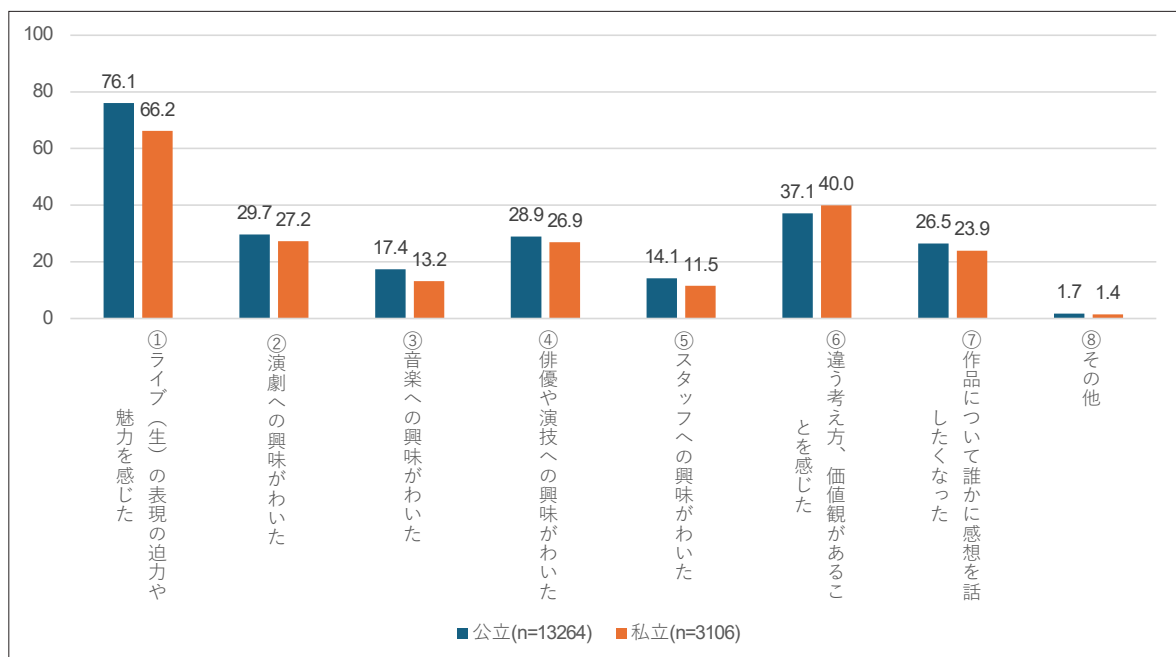
※本図表では無回答を除いて集計。

(3) 鑑賞作品の家族・友人への推奨度 (単位: 点)



※ 10 点満点による平均点である。本図表では無回答を除いて集計。

(4) 鑑賞後に感じたこと (複数回答, 単位: %)

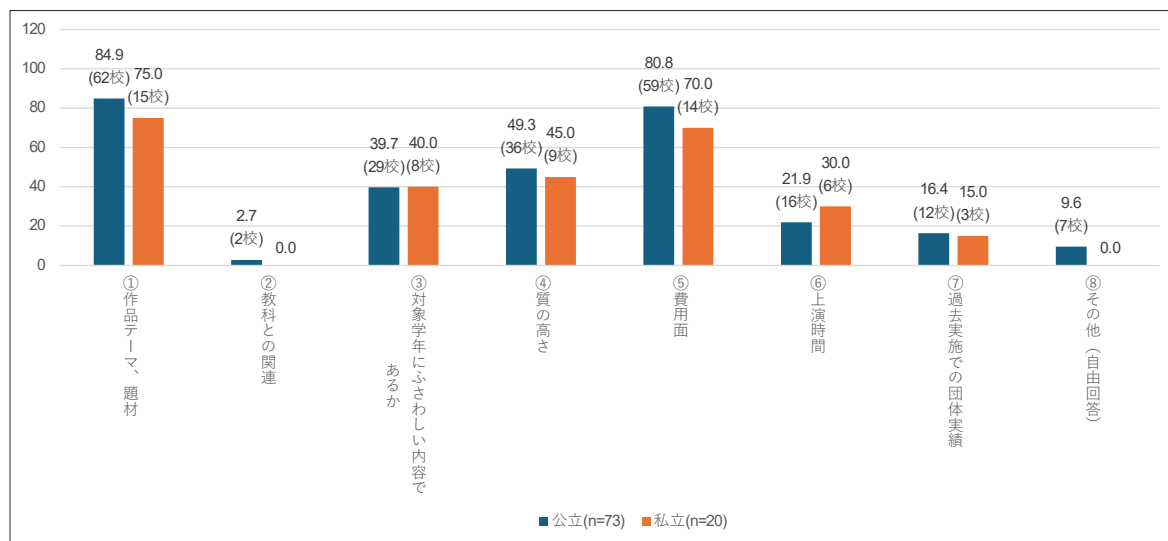


※本図表では無回答を除いて集計。

2. 実施校アンケートの比較

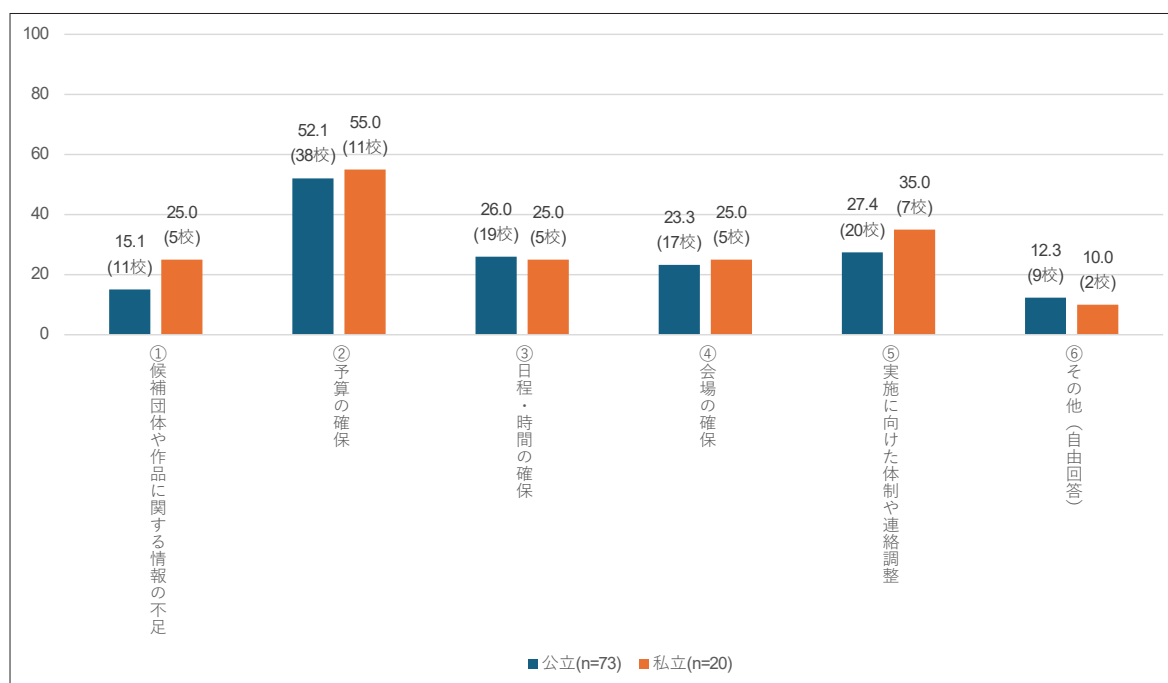
実施校アンケートについても公立校と私立校を比較したが、いずれの項目についても顕著な差は見受けられなかった。

(1) 芸術鑑賞会において重視していること（複数回答，単位：％）



※集計母数が少ないため、パーセンテージ表記に加えて度数（該当校数）を併記した。

(2) 芸術鑑賞会実施にあたっての困りごと（複数回答，単位：％）



※集計母数が少ないため、パーセンテージ表記に加えて度数（該当校数）を併記した。

おわりに

「すべての学校に演劇を！」 実現するために2

田辺素子（(公社) 日本劇団協議会教育事業部部长）

（公社）日本劇団協議会では、昨年度（令和5年度）に、巡回公演事業実施校及び鑑賞者（生徒）アンケートの他、23府県の学校に対して各府県教育委員会のご協力のもと、高等学校における芸術鑑賞会に関するアンケート調査を行った。結果、演劇鑑賞は「中国・四国地域／生徒数の少ない学校／定時制高校で機会が少ない」という学校区分・生徒数・地域など様々な要素による機会格差が明らかになった。この調査を受けて、令和6年度は、従来の巡回公演の他に全学年の生徒数が360名以下の学校を小規模校として整理し、別枠を設けて公演事業を行った。

報告書本文にもあるように、小規模校の実施校アンケートでは、「芸術鑑賞会で重視している事」として「作品テーマ・題材」「費用面」に10校すべて、「芸術鑑賞会実施に当たっての困りごと」として「予算面の確保」に10校すべてが該当すると回答している。作品内容と予算面のバランスが大きな要因となって、小規模校における芸術鑑賞会の実施機会は格段に少ないと言える。ある程度予算が必要となる演劇公演では更に実施率が低いことも詳しいインタビューを通じて浮かび上がってきた。また、「情報の不足」も令和5年度調査と同様に小規模校ほど数値が高いという結果であったが、これは、劇団側も予算面で成り立たない学校に対しては働きかけが薄くなってしまうという実情が要因となっており、ジレンマである。

また小規模校では、アンケート調査の他に10校すべての学校でご担当の先生にインタビューをさせて頂いた。この中で、鑑賞教室だけではなく「総合的な探求の時間」などで、演劇ワークショップを実施し、生徒や先生方の変化があったなど、演劇の有効性を確信する事例との出会いもあった。

実施状況としては、3年に1回、予算を積み立てて実施している学校や、地元のアマチュア団体の作品や落語・狂言など公演人数が少ない公演を鑑賞している学校、自治体から何らかの助成を得るなどして毎年実施している学校など、頻度・予算・ジャンルはまちまちであるが、何かしらの工夫により芸術鑑賞会を継続している学校ばかりであった。これは、芸術鑑賞会を継続していきたいという学校での行事の位置づけがあることに加え、劇団から学校への途切れることのない声かけ・話し合いで実現したところが大きい。そして今回実施した小規模校からは、「来年度もこの事業を活用できないか」というご要望を多数いただいた。今後も続けていくために、近隣の学校との合同開催を希望されている学校もあった。しかしながら、全国的な傾向としては、各地の合同鑑賞会は年々減ってきており、残り僅かとなってしまっている。合同鑑賞会がなくなると、小規模校の単独開催は難しく、学校行事から消えてしまう可能性も高い。学校行事から一度消えてしまうと、復活することは非常に困難であることから、合同鑑賞会が、「すべての学校に演劇を！」を実現するための方策の一つであることを改めて感じた。

今年度の巡回公演事業で実施できたのは全体で 94 校、そのうち小規模校は 10 校。たったこれだけなのである。この事業以外に、減少傾向とはいえ、各劇団が展開する多数の公演のほとんどが、助成もなく劇団の努力と学校の努力により実施されている。

令和7年度の実施については国の支援枠が組まれておらず、本事業の今後の展開には不透明さを抱えているが、私たちは引き続き、学校公演（特に体育館公演）が抱える上演環境や人員、経費などといった様々な過酷さを乗り越えて、全国すべての高校生が格差なく豊かな演劇体験ができる環境を作るために活動をしていきたい。そのための新たな助成スキームの構築提案も急務となっている。なぜならば、予測されている今後の人口減少を考えれば、さらなる格差が生まれると予想されるからだ。

歯止めをかけるための事業展開を今後も継続していくことを誓うとともに、ご多忙の中、ご協力いただいた実施校・各県の教育委員会などの皆様に、改めて感謝を申し上げたい。

寄稿

（日本劇団協議会機関紙「Join」111号より再掲）

寄稿

演劇教室で何を見せるのか？

川名俊生（桐朋中学校・高等学校 国語科教諭）

演劇教室（演劇鑑賞行事）で何を生徒に見せるのか。とても難しい。調査をしたことはないので正確な数字はわからないけれど、きっとこの学校行事以外では在学中に劇場に行く機会がない生徒は多いのではないかなと思う。そして、入学前と卒業後の将来を含めても、舞台芸術の鑑賞体験を一生のうちで数えるほどしか持つことがない生徒もそれなりにいるだろう。（もちろん、理想としてはこの先、自分でも劇場に行ってみようと思えるような体験をさせてあげたいのだが）

さて、その中で何を見せるのか。やはり難しい。単に自分が観るものであれば「今日の作品は今ひとつだったな」となってもある程度は許せる。が、ここではそうはいかない。良くも悪くも、「これが演劇か」と受けとめる生徒が多い。面白いと思えなければ、その生徒にとって演劇や舞台芸術というものの印象がそれきりになってしまう可能性もある。もちろん、ここでの「面白い」とは、ただ愉快地楽しい時間を過ごせればよいということではない。文化芸術としての魅力を感じられるかどうかだ。

制約も多い。まず、スケジュール。授業や試験、ほかの行事などもさまざまある中で、候補日になりうる日程は毎年限られたものになってしまう。次に、人数規模。1学年でも300名以上、3学年だと900名以上の生徒数がある本校では、数百人規模の観客にしっかりと届けさせられる作品でないと候補にはなりえない。そして、予算。学校によって事情も異なるだろうが、少なくとも本校では有名俳優が勢ぞろいするような大きな舞台で貸切公演をしてもらうようなことは到底できない。

しかし、そんな難しさがありながらも、やりたい、やるべきだと思っているから毎年やっている。演劇や舞台芸術だからこそ、この表現形式だからこそその面白さに出会える場を提供したい。学校で行かなければなかなか劇場に行かない生徒が多いと思われるからこそ。それが第一だ。無論、いかにも玄人向けというような難解な作品をいきなり見せるのは厳しすぎるし、ある程度は入っていきやすい作品がよいと思うけれど、同時にしっかりと深みもある「本物」を見せたい。内容的に何かを考えるきっかけとなる部分を含んでほしいという気持ちもあるにはあるけれど、言語化できるメッセージを伝えるための手段となってしまうような作品では、「演劇教室」として見せる意味は薄くなってしまう。文字を読むことや講演を聴くこと、映像を見ることで代替できるものではなく、演者と空間を共有しながら生の上演を観るからこそその面白さに触れてほしい。情報だけなら日々いくらでも入ってくる現代社会だが、それだけではやはり実感を伴わなくなってしまうことが多い。だからこそ、実際にいろいろな場所に足を運んだり、そこにいる人に出会ったりする体験を持つことは大切だ。しかし、そうした現実世界そのものから得られる実感とはまた別に、上演によって立ち現れる異空間に身をひたし、自分自身の想像力も働かせながら感じ、考える、舞台芸術の鑑賞体験によってしか得られない特殊な実感というのもある。そして、その実感が物の見方や考え方を押し広げてくれる。そういうことがあるというのは、すぐれた舞台作品を多く観てきた人であればよくご存知のことだろうが、彼らがその一端に触れられるような作品をぜひ観せられたらと思う。

寄 稿

高校生の成長に貢献する芸術鑑賞

川口浩幸（石川県立加賀高等学校教諭／石川県高文連文化教室常任理事）

石川県では毎年、演劇または音楽を鑑賞する機会を「すべての高校生」に与えている。その意義に関しては長年のあいだ、さまざまな意見を各校からいただいていた。しかし、現在までいろいろな時期を乗り越えながらも続けてこられたということは、高校生に演劇鑑賞の体験をさせることの価値が認められているからであると考ええる。そこで、これまで高校生に演劇鑑賞をさせたことで見られてきた成長を三つの観点に分けてまとめてみたいと思う。

まず、「教養と感性の涵養」である。演劇では言葉と動作、舞台装置などさまざまな要素を複合的に用いてストーリーを表現する。その鑑賞を通して表現方法の多様性や奥深さを理解し、自身の表現力向上に繋げることができる。また、登場人物の感情や状況に共感することで、他者理解を深めたり、想像力を豊かにすることができる。異なる視点や価値観に触れる機会でもあり、「多様な社会への適応力」を高めることにもなる。

さらに、文学作品を原作とした演劇においては、原作と演劇作品との違いを比較することで、文学作品への理解を深め、新たな魅力を発見するきっかけにもなる。時代劇や歴史を題材にした演劇は、歴史や文化への理解を深めるのにも役立つ。

二つ目に、「批判的思考力の育成」である。演劇には一人一人が自由に解釈できる余地がある。さまざまな解釈に触れることで自身の考えを深め、多角的な視点を持つことで深い解釈ができる力が養える。また、演技・舞台装置・照明・音楽などの構成要素を分析することで、作品全体の意図やメッセージの理解を深め、批評的な思考力をも養うことができる。社会問題をテーマにした演劇では、「社会問題への関心や問題意識」を高め、自ら考え、行動するきっかけにもなる。

最後に、「人格形成への貢献」である。演劇は感動体験を共有できる場である。演劇鑑賞後に仲間と感想を語り合うことで、「コミュニケーション能力や協調性」が高まる。作品の中で、さまざまな生き方や価値観に触れることで、自分自身の生き方を見つめ直す機会になる。また、演劇鑑賞は表現することへの関心を高め、「自己表現への意欲」を高める。

演劇鑑賞は、単なる娯楽ではなく、高校生の成長に大きく貢献する「貴重な学習機会」と言える。ゆえに、どのような演劇を選ばせるか、ディスカッションなど、鑑賞後にどのような活動を行うかを議論していくことで、その価値はさらにいっそう高まるものと考えている。

寄稿

AI時代を生き抜くために必要な力

澤田大樹（TBS ラジオ記者）

私は父親が劇団員、母親が「こども劇場」の事務局長という家庭に育ったこともあり、演劇は身近な存在だった。私は現在もこども劇場の理事を務めていて、子どもとよく観劇に行くし、感想を語り合うことも当たり前になっている。しかし、多くの子どもたちにとって演劇は身近なものではないと感じることも多い。それというのも「YouTube」や「Netflix」といった動画配信プラットフォームの隆盛で、スマホひとつで完結するメディアが身近な存在となり、数千円～1万円のチケット代を払わないと体験できない演劇の優先順は低いからだ。

ただ、自身の体験に立ち返ると、幼少期に多くの舞台に触れたことは、記者として必要な万物の本質をつかむ能力を育むことにつながったし、他者とコミュニケーションをとることへのハードルを下げたようにも感じる。

現在、AI時代に突入し、今後、社会における学力や学歴といったものの優位性が低下し始めると指摘されている。そのような時代に必要とされるのが「非認知能力」である。非認知能力とは、知能検査や学力検査では測定できない能力を意味し、リーダーシップ、責任感、社会性などがそれにあたる。教育経済学者の中室牧子によれば、非認知能力を伸ばすには、幼少期に音楽や美術といった芸術に触れることが効果的だとのエビデンスがあるという(中室牧子『科学的根拠で子育て』など)。

芸術作品の表現を受け止め、思考したり感想を分かち合うことができるのは幼少期に留まらない。私は高校演劇も取材しているのだが、高校生が自ら上演し観客の多くも同年代である高校演劇の観劇後の感想を聞いていると、部員たちは実に多くのものを受け取っている。体験する機会があれば、芸術鑑賞は高校生たちにさまざまな影響をもたらすと言える。

社会の格差が広がり貧困が固定化する現代では、7人に一人の子どもが「相対的貧困」の状態にある。そういった家庭においては観劇などの文化活動に回す経済的余裕はなく、子どもたちと演劇との距離はますます広がる状況にあり、非認知能力を高めるために必要とされる体験が生まれた家庭の経済状況によってなされない現実が起きている。これは「体験格差」と呼ばれ、貧困の再生産や固定化につながっているとの指摘もある。

芸術鑑賞体験の場を用意するのは大人の役割で、今後も機会づくりが必要だ。さらに言えば、スポット的な観劇体験だけではなく、学校の授業・ワークショップなどを通して感想のシェアや表現を学ぶフォローアップも必要であろう。AI時代を生き抜く子どもたちのために必要な能力を育むために、「体験をする場の確保」が求められている。

參考資料

鑑賞者(生徒)用アンケート(2024年)

今回鑑賞した作品名／団体名： _____

学校名: _____

Q1 今回の鑑賞会より前に、演劇(ミュージカルを含む)を鑑賞したことはありましたか？

- ① ある (⇒タイトル: いつ頃:)
- ② ない

Q2 今回の作品の満足度を教えてください。

- ①不満 ②やや不満 ③ふつう ④満足 ⑤大変満足

Q3 親しい友人や家族に、この作品をオススメしたいと思いますか？(10段階で回答してください。)

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10
 思わない 非常にそう思う

Q4 鑑賞後に感じたこととして、該当するものがあれば○をつけてください。(いくつでも)

- ①ライブ(生)の表現の迫力や魅力を感じた
②演劇への興味がわいた
③音楽への興味がわいた
④俳優や演技への興味がわいた
⑤スタッフへの興味がわいた
⑥違う考え方、価値観があることを感じた
⑦作品について誰かに感想を話したくなった
⑧その他()

Q5 作品の感想(印象に残った場面や、感じたこと、良かった点など)を聞かせて下さい。

鑑賞者(生徒)用アンケート(2024 年)

◆オンラインでの回答は、以下の URL からご回答ください。

アドレス ⇒ <https://forms.gle/y1ph9VM3VGyB4LU8A>

QR コード ⇒



<リンク先での設問は、以下の通りとなっています。>

今回鑑賞した作品名／団体名： _____

学校名： _____

Q1 今回の鑑賞会より前に、演劇(ミュージカルを含む)を鑑賞したことはありましたか？

- ① ある (⇒タイトル： _____ いつ頃： _____)
 ② ない

Q2 今回の作品の満足度を教えてください。

- ①不満 ②やや不満 ③ふつう ④満足 ⑤大変満足

Q3 親しい友人や家族に、この作品をオススメしたいと思いますか？(10 段階で回答してください。)

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10
 思わない | | | | | | | | | 非常にそう思う

Q4 鑑賞後に感じたこととして、該当するものがあれば○をつけてください。(いくつでも)

- ①ライブ(生)の表現の迫力や魅力を感じた ②演劇への興味がわいた
 ③音楽への興味がわいた ④俳優や演技への興味がわいた
 ⑤スタッフへの興味がわいた ⑥違う考え方、価値観があると感じた
 ⑦作品について誰かに感想を話したくなった ⑧その他(_____)

Q5 作品の感想(印象に残った場面や、感じたこと、良かった点など)を聞かせて下さい。

＜実施校アンケート 兼 観劇終了書＞

実施公演名		劇団名	
公演日		開演時間	
ステージ数		観劇者数	
鑑賞者(生徒) アンケートの実施有無 (○をおつけ下さい)	あり (WEB / 紙面) ・ なし	鑑賞者アンケート 「あり」の場合、 対象生徒数(配布数)	

◆演劇の芸術鑑賞会を実施される際、作品選定において重視されていることを教えてください。(複数回答可)

- ①作品テーマ、題材 ②教科との関連 ③対象学年にふさわしい内容であるか
④質の高さ ⑤費用面 ⑥上演時間 ⑦過去実施での団体実績
⑧その他()

◆実施にあたり、普段、お困りのことがあれば教えてください。(複数回答可)

- ①候補団体や作品に関する情報の不足 ②予算の確保 ③日程・時間の確保 ④会場の確保
⑤実施に向けた体制や連絡調整 ⑥その他()

◆今回の公演について、ご意見ご感想をお聞かせください。

令和 6 年 月 日

住 所
学 校 名
学校長名

印

《実施校様／視察時ヒアリングシート》

この度は、お忙しい中ヒアリングのお時間をいただき、誠にありがとうございます。
当日は、以下の内容についてお尋ねさせていただければと思っております。当日その場ではご回答が難しい内容などございましたら、後日お知らせいただく形でも結構でございます。

今後の検討のために、先生方の率直なご意見をお聞かせ願えますと幸いです。

(■インタビュー的にお答えいただく内容 Q:分析のため選択式でお答えいただく内容)

=====

■鑑賞会のご感想(作品や生徒さんの様子について)

■今回、実施に至ったきっかけや理由について

■貴校における芸術鑑賞会のこれまでの実施状況、予算確保、担当の先生の配置等について

Q1 貴校における芸術鑑賞会の開催頻度を教えて下さい。(※文化祭等の発表会を除く)

① 毎年1回 ②2年に1回 ③()年に1回 ④不定期 ⑤その他()

Q2 芸術鑑賞会として、近年(直近5年程度)実施されたジャンルを教えてください。(複数回答可)

① 演劇 ②音楽 ③伝統芸能 ④ その他()

Q3 実施するジャンルの選択方法について、教えてください。

① 毎回決まったジャンルで実施している ②年度によって、予めジャンルが決まっている
③ ふさわしい内容があるジャンルを選択している ④その他()

Q4 芸術鑑賞会の実施意義として、重視されていることを教えてください。(複数回答可)

①本物の芸術に生で触れる機会の創出 ②生徒間の文化体験格差の是正
③多様な価値観に触れる機会の創出 ④感受性や表現力の向上
⑤学校生活の思い出づくり ⑥その他()

Q5 演劇の芸術鑑賞会を実施される際、どちらの会場を希望されますか。理由とともに教えてください。

①体育館(理由:)
②近隣会館・ホール(理由:)

■今後の継続・展開に関するご意向や認識されている課題、ご要望等について

■行政や他の関係機関などの協力・支援の可能性について

令和 6 年度
実施公演概要
(7 団体・7 作品)

・

鑑賞者（生徒）
アンケートの声



写真左より／宮腰裕貴、山内周祐
撮影／横浜市立戸塚高等学校校定時刻

劇団うりんこ 『クローゼットQ』

〔作・演出〕 田辺剛

〔出演〕 下出祐子、内田成信、宮腰裕貴、鷺見裕美、山内周祐、高島絵里（以上、うりんこ）／大谷勇次

〔ステージ数／公演地〕 18校 11ステージ／神奈川県、長野県、三重県、兵庫県

〔制作〕 うりんこ

◆鑑賞者（生徒アンケート）感想より（抜粋）

- ・今まで演劇は見たことがなくどんな感じなのだろうと思っていたが、今回鑑賞してみて演劇にとっても興味を持った。一見全然違う2つのストーリーが交わっていくのが、みていてとても面白かった。ユウキの部屋が取り壊されてしまったら、部屋を運ぶ仕事をしている人たちはどうなるのだろうとその後の展開の想像も膨らみ面白かった。
- ・音や迫力が凄くてとても感動した。また、ストーリーも今の私達に共通するものがあって、自分の生活を振り返ってみて墮落した生活を控えようと思った。凄く面白かった！
- ・場面によって主人公となる人物が変わるのが新鮮で、見ていて理解したときは衝撃を受けた。自分の周りだけの狭い世界だけでなく世界や社会などの広い世界で生きていきたいと思った。作品を見終わった後言葉では表せないような感動があり、すごいと思った。
- ・全ての答えを示すのではなく、観客に想像させることも多く、多様な解釈ができるところが演劇の良さの1つでもあると感じた。とても面白かった。
- ・自分の意思を持たないのは楽だけど、どこか違和感があって、自分の本当の気持ちに耳を傾けることが大切だと思った。世の中を知らずに引き篋もったり、目的を持たず単調な作業をしたりすると価値観や考え方が窮屈になってしまうことが分かった。何事にも挑戦することで新しい見方ができることを学んだ。挑戦の精神を大事にしたい。
- ・後の交流会で、舞台のセットや裏側について多く聞いて、たくさんの努力によって一つの劇が作られているのだと知ることができた。主人公の部屋にも登らせてもらえて、セットの詳細を見ることができた。私はあまり演劇を観ることがないので、貴重な体験ができたと思う。



写真左より／高野うるお、武田茂、岡原真弓、沖まどか
撮影／新村猛

オペラシアターこんにゃく座 オペラ『さよなら、ドン・キホーテ!』

〔作・演出〕鄭義信 〔作曲・音楽監督〕萩京子

〔出演〕岡原真弓、富山直人、高野うるお、島田大翼、沖まどか、壹岐隆邦、武田茂、飯野薫（以上、オペラシアターこんにゃく座）／大坪夕美（ピアノ）

〔ステージ数／公演地〕8校10ステージ／岩手県、京都府、岡山県、広島県

〔制作〕オペラシアターこんにゃく座

◆鑑賞者（生徒アンケート）感想より（抜粋）

- ・ユダヤ人であるだけでドイツ軍に迫害される自身の境遇を嘆きながら語った、「国が違う、宗教が違う、人種が違う、それだけで、なぜ人は争うの?」という台詞に、違いを認めず、他者を受け入れないために争い合う人間の愚かさを考えさせられた。
- ・オペラを今まで一度も見たことがなく、想像がつかなかったが、今回鑑賞してみて、表現力や迫力を感じました。生で見ることで画面越しよりもいいと思った。
- ・キャストの歌声がすごく綺麗で、聞いていて心地よかった。
- ・ナチスや戦いなど歴史の授業で学んだことが劇になっていたり、ジェンダーのことを表現してあったり、また、友情や諦めない気持ちも感じて、今まで見てきたミュージカルとは違うところがたくさんで、考えさせられることがあった。
- ・一人一人の個性的な人柄が表現されていたり歌を交えていたり物語が頭に入りやすかった。なにより歌で人物の気持ちなどを表しているのが魅力的だと感じ楽しい作品を見ることができた。
- ・戦争はあったものとしか考えられていなかったが、今回の演劇を見て、あったものとして捉えるのではなく、どんなに悲惨なものなのかを学んでいかなくはいけなかったと感じた。
- ・戦争をしても誰も幸福にはならないことがわかった。それぞれの正義のために戦っているけど、その考え方を否定しないで分かり合うことが大事だと思った。演者さんの感情表現がとてもうまくて一人一人の心境がわかりやすかった。この表現を引き出しているのは演者さんだけではなくピアノや照明の使い分けもあったと思った。
- ・舞台は昔の話なはずなのにどこか今の世界を感じる部分が何度かあって不思議な気持ちになりました。



写真左より／岡本有紀、原田真衣、竹森琴美、武智香織
撮影／鈴木ヨシアキ

青年劇場 『行きたい場所をどうぞ』

〔作〕 瀬戸山美咲 〔演出〕 大谷賢治郎

〔出演〕 奥原義之、船津基、武智香織、岡本有紀、秋谷翔音、原田真衣、竹森琴美（以上、青年劇場）

〔ステージ数／公演地〕 14 校 14 ステージ／神奈川県、京都府、福岡県、長崎県、熊本県、大分県、鹿児島県

〔制作〕 青年劇場

◆鑑賞者（生徒アンケート）感想より（抜粋）

- ・自分の可能性について考えさせられる演劇だった。
- ・「誰かと死にたいじゃなくて、誰かと一緒に生きたい」という言葉が印象的だった。
- ・大きなセット変更がないのに場面が変わるごとにどこにいるのか分かりやすくおどろいた。演劇をあまり観たことがなくて、どんなものか分からなかったけど、俳優さんたちの演技や表情に惹かれて、とても面白かった。また機会があれば観てみたい。
- ・演者の方々とはいえ、通る声で難しい長台詞を話したり感情を動きに乘せたりしているのを見て細かな工夫を感じた。とても感心させられる作品だった。
- ・行きたい場所が物理的なものではなくそれぞれが生きたい場所という意味なのかなと思った。
- ・今までで見た演劇の中で一番心に残った。
- ・選択はたくさんあって何事もチャレンジをすることを大切にしたいと感じた。高校でこれからに向けて進路を決めていくけど、精神面で参考になることがあって良かった。
- ・人によって考え方や価値観は大きく異なり、その違いによって生まれる対立もあることを改めて感じた。だが、自分なりの考え方や、「自分」そのものを見つけることが一番幸せだと思った。
- ・初めて生で見たから、1 番は迫力がすごいと感じた。他もしっかり見ないと分からない、とても細かい部分まで表現されていて演技や演出に魅了された！ 内容も、最近私が疑問に思っていることにリンクしていて、色々な考えがあるなど考えさせられた。
- ・夕風の首の動かし方、感情の無いようであるような声、少しずつ人間を理解し始めるその変化が演技に表されていて感心した。怒鳴るシーンの迫力と、その背後に隠れた哀しさのミックスが圧倒的だった。



写真中央／雨宮大夢
撮影／松浦範子

東京演劇アンサンブル 『走れメロス』

〔作〕 太宰治 〔脚本〕 広渡常敏 〔演出〕 公家義徳

〔出演〕 雨宮大夢、永濱渉、浅井純彦、永野愛理、細谷巧、戸澤萌生、三木元太、洪美玉、町田聡子、福井奏美、鈴木貴絵、林亜里子（以上、東京演劇アンサンブル）

〔ステージ数／公演地〕12校12ステージ／埼玉県、山梨県、岐阜県、静岡県、愛知県、福岡県、長崎県、宮崎県、鹿児島県

〔制作〕 東京演劇アンサンブル

◆鑑賞者（生徒アンケート）感想より（抜粋）

- ・観客席にもメロスが走ってきて、ホールにいるすべての人を巻き込んだ形の劇でとても良かった。また、「メロスが今は砂漠にいるな」や「川にいるな」と分かるような、周りでの演奏が良かった。
- ・本当はあまり良くなかったのだと思いますがみんな思い思いに声を出して反応しながら演劇を見ていたのが新鮮で良かった。全くの別物ですが少しイマーシブシアターのように楽しかった。
- ・文字で読むのとはひと味もふた味も違ったとても素敵な「走れメロス」だった。教科書の中のメロスを応援したくはならなかったが、実際に近くを走るメロスやコロスの皆さんを見ていたら応援せずにはいられなくなり、それを直接演者のみなさんに伝えられるのも演劇の魅力だと感じた。身一つで見ている私達にこんなに感動を与えることができるのかと、みなさんの持っていらっしゃるエネルギーに感動した。
- ・会場全体を使った演出と演技にとっても感動した。演劇や音楽が好きなので楽しかった。
- ・物語については知っていたけれど、この作品の演劇は初見だったので表現の仕方が面白くて最後まで真剣に見ることができた。メロスが困難に立ち向かう場面では、風の役など様々な役柄があり、見ていてとても面白く、沢山の表現の仕方があるのだと改めて知ることができた。
- ・メロスの生きたいという思いの表現とそれでもセリヌンティウスのところへ走ったところが印象に残った。自分の身を案じながらも自分の信念である嘘をつかないことなどを守り走ったところに、人間の心の弱さとそれを上回るメロスの強い気持ち、人の素晴らしさに再び気づいた。
- ・役者さんの必死にやっている演技、登場人物の思いが、たくさん自分の中に入ってきてとても面白く楽しかった。



写真左より／笹岡洋介、星野子熊、森路敏、しもじい、平田正治
撮影／成毛章浩

東京芸術座 『12人の怒れる男たち』

〔作〕 レジナルド・ローズ 〔訳〕 額田やえ子 〔演出〕 杉本孝司

〔出演〕 笹岡洋介、しもじい、手塚政雄、小杉幸彦（6月）、岡田篤弥（10～12月）、神谷信弘、鈴木健一朗、
星野子熊、森路敏、松並俊祐、平田正治、脇秀平、小川拓郎、真野等坪（以上、東京芸術座）

〔ステージ数／公演地〕 19校 19ステージ／北海道、青森県、岩手県、秋田県、岐阜県、静岡県、島根県、岡山県、
福岡県、長崎県、熊本県

〔制作〕 東京芸術座

◆鑑賞者（生徒アンケート）感想より（抜粋）

- ・正直最初は裁判の話なんて難しくて面白くなさそう、見るのが少し面倒くさいと思っていたけど一人一人の演技がすごく迫真で見ていて楽しかった。内容も分かりやすく、すごく考えさせられた。他人の意見をちゃんと聞いて理解することと自分が少数側だとしても自分の思ったことや感じたことをしっかり言うことの大切さを学んだ。私も他人の意見に流されずに自分の意見をしっかり持ってそれを人に伝えることができるようになればいいと思った。
- ・予想以上に面白くて良かった。演技している人の表情とか声とかすごく良かった。喋っている人の方を見るだけじゃなくてそのキャラにあった動きをしていて見ていてとても楽しかった。光の当たり方とかもなんか良かった。怒りとか悲しみとか驚きとかも見ていてわかりやすかった。
- ・演劇の迫力がすごく、演劇を鑑賞しているうちに夢中になり、演出もとてもよく、魅力を感じられた。演劇を鑑賞することは滅多にないので貴重な体験だと思った。親や家族といっしょに演劇を鑑賞することはあまりないので、家族にも魅力を伝えて一緒に行きたいと思った。
- ・最初はあんまり演劇とか興味もなかったし、劇名を見ただけではマイナスイメージが強かった。けど、実際に鑑賞して迫力がすごくて話が進めば進むほど興味が湧いてきてずっとこの時間が良いなと思った。
- ・背景のセットを一回も動かさないで劇ができることに驚いた。セリフがないときの動き、つぶやきにしてもプロって感じがして、感動した。
- ・距離が近かったこともあり、とても迫力を感じることができ、世界に入り込むことができてとても面白かった。もっと色々な作品を見てみたいと感じた。素敵な体験だった。



写真左より／中島沙結耶、早坂聡美、宮崎愛美、齊藤美香、佐藤凜
撮影／成毛章浩

劇団銅鑼 『いのちの花』

〔原作〕 向井愛実著「いのちの花」 瀧晴巳著「世界でいちばんかなしい花 それは青森の女子高生たちがペット殺処分ゼロを目指して咲かせた花」

〔作〕 畑澤聖悟 〔演出〕 齊藤理恵子

〔出演〕 馬淵真希、佐藤響子、久保田勝彦、野内貴之、亀岡幸大、池上礼朗、早坂聡美、中島沙結耶、宮崎愛美、佐藤凜、齊藤美香（以上、銅鑼）

〔ステージ数／公演地〕 7校7ステージ／宮城県、山形県

〔制作〕 銅鑼

◆鑑賞者（生徒アンケート）感想より（抜粋）

- ・「いのち」という概念をより深く考えられる良い機会だった。これからも動物の殺処分やいのちの大切さについて深く考えていこうと思いました。
- ・最後にマリーゴールドを受け取れたのが嬉しかった。命の大切さについて改めて気付かされたので、感謝してご飯を食べようと思った。
- ・おばあちゃんが「生きている者が死んだ者にできることは、大事に思うことだけ」という場面が一番印象に残った。他の場面の鶏の解体や殺処分や骨ってなんだろうとなるシーンもかなり印象的で、観ていると自然と命ってなんだろう、今観ている時間も殺処分されている動物がいるのだろうかなど考えさせられる演劇だった。短い時間でしたがとても詰め込まれていて非常に学びの多い演劇だった。
- ・もともと演劇に興味があり演劇を見ることが好きだったのでとてもいい時間になった。自分にはない表現力を持った俳優さんたちがすごくかっこよく自分も一回はステージに立って演技をしてみたいと更に思った。
- ・言葉では言い表せないくらいの素晴らしい作品だった。人間＝動物と考えてほしいと思った。人も動物も全く一緒の「命」というものを持っているので、ひとつも欠けて欲しくない。
- ・初めて演劇を見たが見ていて引き込まれるような内容で、とても面白かった。いのちの大切さについて自分たちの意見を通して実際に実現しようと考えるところや価値観が感じられて心に沁みました。このような芸術鑑賞会は今後もやった方が良かったと思った。
- ・本で読んだことがあった物語だったが生で見ると迫力の違いなど色々な点で感動した。実際にあった話だったので自分たちにも出来ることがないかなどを考えられるいい機会だった。



写真左より／遠藤浩子、千葉真琴、鈴木裕樹、黒木友宜、遠田雅

わらび座 ミュージカル『北斎マンガ』

〔脚本・演出〕マキノゾミ 〔作曲〕八幡茂

〔出演〕鈴木裕樹、遠藤浩子、千葉真琴、黒木友宜、内田勝之、遠田雅、上平美咲、村中琉奈、黒木真帆（以上、わらび座）

〔ステージ数／公演地〕16校16ステージ（青森県、宮城県、秋田県、福島県、茨城県、山梨県、静岡県、愛知県、滋賀県、兵庫県、岡山県、広島県）

〔制作〕わらび座

◆鑑賞者（生徒アンケート）感想より（抜粋）

- ・北斎漫画という題材なのでてっきり和の雰囲気があるようなものだと思っていたが、明るいポップなものだったので最初はとても衝撃的だった。思っていたよりも面白くクスッと笑えるような場面や、少ししんみりする場面もあり喜怒哀楽しながら楽しめた。北斎という人物は富嶽三十六景などでしか知らなかったなのでこのミュージカルを通して北斎の生き様を学ぶことができとても良かった。
- ・最初の歌に迫力があり、とてもおもしろかった。ミュージカルを初めて見たので最初はテレビで見ているようなかと思っていたが予想とは全然違ってとても楽しく見る事ができた。
- ・正直最初はミュージカルのことを全く知らなくて興味なかったけど、劇団の皆さん一人ひとりが楽しみながら演技をやっているというのが伝わってきて、このミュージカルは見ていて飽きなかったしとてもよかった。堂々と人前に立って演技している姿がかっこよくて、自分の中ですごく印象に残った。
- ・コロナ禍であんまり生で何かを見る機会がなかったので、やっぱり生の演技というのは迫力があり、生の演技でしか得られないものがあるなと思った。
- ・小学生の頃から定期的に演劇を見ていたが今回の芸術鑑賞会を通して演劇をまた見たいと思えたとし、何より見ていて楽しかった。
- ・江戸時代が舞台の作品だったが、ヒップホップなどの現代的な要素があったり、その時代を生きた人々や、時代背景がわかりやすく、面白い解説もところどころ挟まれていて、歴史が苦手な人でも楽しんで見られる作品だった。最初はずっと沈んでいて生きる気力を無くしていたおことさんが北斎と出会ってから次第に表情や振る舞いが明るくなっていく様子に、見ていてとても温かい気持ちになった。

令和 6 年度 統括団体による高校・過疎地域等学校派遣モデル事業
『高校生のための巡回公演』

令和 7 年 3 月発行

発行 公益社団法人日本劇団協議会 事務局
〒160-0023 東京都新宿区西新宿 6-12-30 芸能花伝舎 3F
TEL：03-5909-4600 FAX：03-5909-4666
info@gekidankyo.or.jp

デザイン：西山昭彦 (hylla)

令和6年度
統括団体による高校・過疎地域等学校派遣モデル事業

『高校生のための巡回公演』

調査研究報告書

主催：独立行政法人日本芸術文化振興会

